

浄土

昭和十四年五月廿一日
昭和十四年四月二十八日
昭和十四年七月二十五日印刷
第三種郵便物認可
郵政省特例優待
第三五二号
昭和十四年八月一日發行

第二十五卷

第八

八月号

天
帝
堂

新刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円二八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を越えて
3. 美的情感を越えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円二八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土八月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

經典 阿難尊者……………(2)

マンモス宗教まかりとおる……………浄土宗教学院新興宗教研究班(11)

作州三霊場参拝記……………中川大仙(18)

高僧伝 道重信教……………大橋俊雄(16)

經典解説 維摩經……………佐藤成順(26)

徳川家墓所発掘に当つて……………村上博了(29)

妙好人伝 抹茶々椀とお念仏……………福富海岳(22)

小倉の上人……………村上博了(5)

浄土歌壇……………岩野喜久代(38)

釈尊の生涯(1)……………佐藤密雄(6)

扉の御法語……………善人になる……………(33)

日本靈異記より……………新刊紹介……………(37)

童心仏心……………勸募日記……………(39)

真理の花たば……………佐藤良智(34)

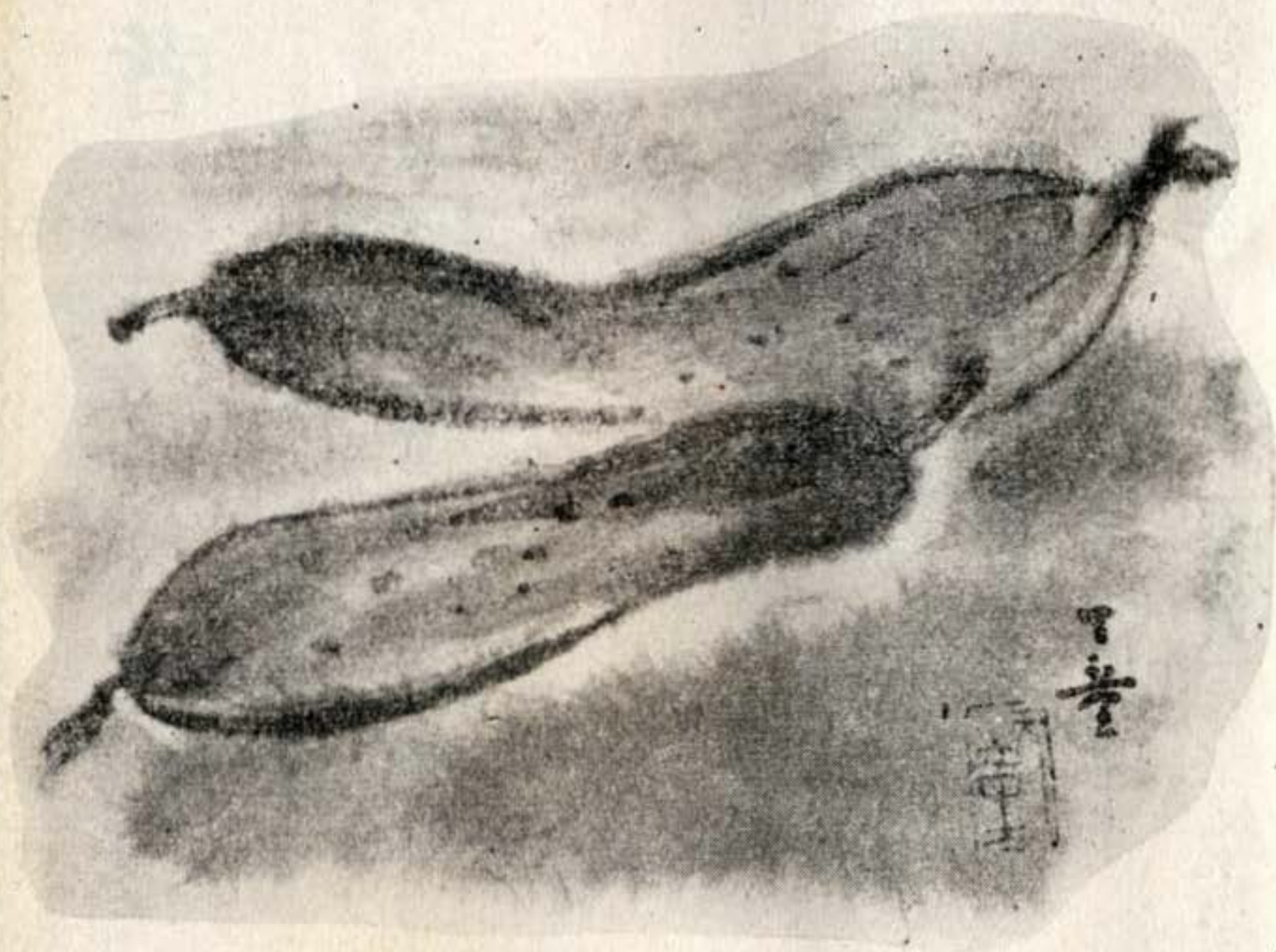
―若き女性への仏教入門(五)―

浄土

八月号

学生骨になりて、念仏やう
しなはんずらん。

法然上人御法語



阿難尊者

かように、わたくしは聞いた。

あるとき、阿難が供養をうけて、その帰りの途すがら、渴を覚えたので、泉のほとりに水を汲む女の傍に立ち、

「もし、その水を飲ませてくださらぬか」

と頼んだ。すると、若い女は、

「尊者よ、私は賤しい種族のものでございます」

とためらいながら答えた。阿難は、

「いや、出家に上下貴賤の差別はない。わたしは、水を求めたのであって、種族を問うたのではない」と。

女は、嬉しげに淨水を汲んで、阿難にささげた。

阿難の気高く美しい姿と、優しいことばは、彼女の心にふかく刻まれた。彼女は、その若い出家のあとをつけて、その宿所をつきとめて家にかえり、母親に言った。

「母よ、私を嫁にやるなら、他の誰のところへもやらないで、阿難尊者のところにゆかせて下さい。そうでなければ、私は一生嫁にはゆきません。母よ、尊者をここにお招きして下さいませ」と。

その母は、呪術に通じていたが、彼女にやさしくいった。

「娘よ、わたしの呪術も、欲を離れた人と、死人とは効力がない。まして、尊者の師、ゴータマ仏陀は、徳高く、

国王の敬いたまう方である。もし、わたしが呪術で尊者をよびよせたならば、わたし達賤民族は、みな殺しにされるかもしれないよ」

しかし、彼女のおもいつめた恋情をせくことはできなかった。食事もとらずに、ただ

「私は死ぬよりほかありません」

と、泣きくずれる始末。母もせん方なく、牛糞を家中の土間一面に塗り、茅を積み、火を点じ、燃えさかる烈火のなかに、百八枚の蓮華を一枚づつ、天地の神々に祈りをこめて投げいれ、「尊者阿難をここに来らしめたまえ」と祈った。

阿難の心はみだれ、歩みは自然に、彼女の家に向かい、いつしかその戸口に立っていた。母娘は喜んで、香を焚き、花を撒いて迎え、美しい褥（しとね）をしつらえた。阿難は、夢からさめたごとく、愕然として恐れおののき、泣いてかき口説く母娘をよそに、一心に仏陀を念じた。母娘はついに、門を閉ざし、呪術で阿難を縛ろうとした。

しかし、仏陀も、阿難の受難を知りたまひ、かく、さとされた。

戒の池、清ければ、諸人の煩惱を洗う、

智慧あるもの、この池に入りて、無明の闇、永劫に消えなん、

こは三世の聖賢たちの、等しく賞讃するところ、

まこと、このわれ、賞讃に値せば、速かにわが弟子をして帰らしめよ。

阿難は、仏陀の加護によって、無事、祇園精舎に帰ることができたが、女は、「尊者は、去ってしまわれた」といつて、悲しみと悩みのなかに、一夜を泣き明かした。

翌日、阿難が、托鉢のために町へ出ると、彼女は、珍しい衣裳をつけ、美しく化粧して待ちうけ、花を慕う蝶のように、かれにつきまとい離れなかった。阿難が停れば、彼女も止まり、歩めば歩み、顔をみつめ、足をみつめ、精舎にま

で追って来て、離れようとしなない。阿難はあさましさと恥しさにいたたまらず、仏陀にたすけを求めた。

仏陀は、「悩むにおよばぬ」と阿難を慰め、彼女に、

「女よ、阿難の妻になりたいならば、父母の許しを受けてきたれ」と。

彼女はよろこんで家に帰り、母を伴って、ふたたび仏陀のもとへやって来た。仏陀は、

「女よ、阿難の妻となるには、まず剃髪して出家しなければならない」と。

彼女は、教誡を受けて出家した。仏陀は、

「女よ、汝は阿難のなにを愛するのか」

「世尊よ、私は尊者阿難の眼が好きでございます。阿難の鼻が好きでございます。口が好きでございます。声が好きでございます。歩きかたが好きでございます。尊者のすべてが好きでございます。」

「女よ、眼にはただ涙がある。鼻には涕（はなみず）、口には唾、耳には垢、身には、ただ汗や尿の不淨があるばかりだ。」

彼女の心のように静まったのを見て、仏陀は言葉をつがれ、

「女よ、愛欲は苦の集まるところである。愚かな者は、燈火に群がる蛾のように、それに身を投げかける。しかし、智者は、そのことを知るがゆえに、愛欲に執われることがない。女よ、汝は、阿難のもとに行け」と。

女は、慚愧し、即座にさとりを開いて、マータンガー比丘尼と称せられるようになった。

小倉の上人

一

正治二年の秋のことであつた。上野国の御家人である蘭田太郎成家は、大番勤仕として、上洛中であつた。

その時、大師は六十八才であつた。京都中は、大師法然上人の念仏化導が、大変盛んであつて、貴賤の人々が多く往訪結縁したのである。成家も人々のあとについて、吉水の庵室に行つたのであつた。

参会の人々は、いづれも柔和な人々であり。合掌して念仏する誠実さが充ち充ちていた。

大師は黒の素絹に、ねずみ色の粗末な大師衣、ニコニコとした温容、みるからに、にじみ出る誠実さをたたえて、教誡されたのであつた。勅修御伝には、その時、大師さまのお話の要旨については、

罪惡生死の凡夫、弥陀の本願に乗じて、極楽に往生するいはれ、世上の無常をいとひ、浄土の不退を、ねがふべき趣云云について、ねんごろな講説であつた。成家は、はじめて知る信仰の世界、生きる灯、

信心全身にみちあふれ、法悦は肝に銘じたので、同年十月十一日、生年二十八才で御弟子となり、智明と名乗るに至つた。

そうして、大師に常随給仕すること六年後の、元久二年に領国上野国に帰えつて、家の子郎徒二十余人を同信の友とするに至つたのである。

領内の酒長の御厨小倉の村に、庵室を造つて、一心に阿弥陀如来を念じ、お念仏を称えたのであつた。世に「小倉の上人」と呼ばれたのである。

二

元日のことであつた、年賀のお祝いの言葉について、同信の友の一人と打合せて、

庵室の庭先で、大音声に、

吾は阿弥陀如来の御使なり、おいでが遅いので、只今西方浄土からお迎いに参つた、いそぎ参られるよう

と云わたしたのである。さあ如来さまのお使いだ、粗略があつては相ならないとばかりに、客殿に請じて、大いに歓待し、丁寧にもてなし種々の引出物を贈つたのであつた。以後、智明の庵では年中の行事として元旦に行ふようになったのであつた。

三

当時この上野国には猪や鹿が山野に多く、田畑を荒しては、農家の歎きの種であつた。狩つても仲々に狩り尽せるものではなかつたのである。領内農家の歎きをきかれては、智明も対策を立てねばならなかつた。そこで、上田三町（九千坪）をよく作り、これを鹿田と名付けて、猪や鹿の食糧田にあてたのであつた。

領内の田耕歌としては、田歌の代りに「念仏」を申させたのである。

お念仏を申しながら、仕事をする訳である。彼は舎弟の蘭田淡路守俊基に対する遺言のうちに、

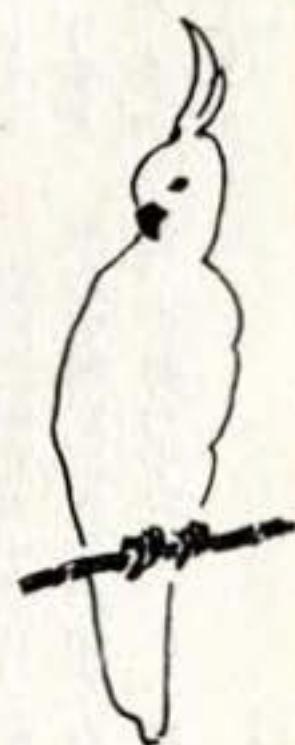
たとひ鹿鳥を食すとも、念仏をば、かみませて申すべし。たとひ敵に向つて、弓をひく共、念仏をすつること勿れ云云とするものがあつた、仕事するにも「南無阿弥陀仏」としたことが、よく判る。

宝治二年九月十六日、高声念仏一時ほど申して禪定に入るが如く入寂したのであつた。世寿七十五才であつた。

(村上博了)

釈尊の生涯

(一)



佐藤密雄

はじめに

われわれが、古代の人物の伝記をえがく場合に、通常資料が乏しく困難をきわめるのであるが、仏教の開祖、釈尊についてこれを見ると、むしろ資料が多すぎて当惑するのである。八万四千の法門といわれる、ほう大な經典は、すべて釈尊一代の教化活動の記録とされているが、しかし、その伝えるところは、かなり矛盾したことが説かれわれわれの常識から判断して、到底歴史的事実とは思われなことが、多くみられる。

經典にえがかれた架空的の創作に類する記事のなかに、古えの人々は釈尊の偉大さを信じたのであるが、現代の如くものごとを批判的、客観的に判断する人々は、それらに満足することができずに、歴史的、実証的な見方をこのむ

のである。

いま、そのことを考慮しながら、いささかでも神秘のベールをとりぞいて、事実の釈尊に近かざきたいと思う。しかし、それなるいとなみは、決して比類なき仏陀釈迦牟尼世尊の真価を失うものでなく、むしろ、そのかぎりない偉大性と面目躍如たるものをつよく感ずるのである。

一、誕生

釈尊 われわれは、通常仏教の開祖を釈尊と呼びならわしているが、これは釈迦牟尼というのを略した尊称である。釈迦牟尼とは釈迦族出身の尊者という意味で、釈迦族は釈尊の出生した民族の名である。

インドでは血統を重んずるがために、正しい血統の民族の出身者には、個人の名のうえに民族の名をつけて呼ぶ場

合が多い。釈尊をこの流儀でいうと、「釈迦族の子である
ゴータマ（瞿曇）シッダルタ（悉達多）」となる。この「釈
迦族の子」という呼び方が、のちに釈迦となり、この民族
の名である釈迦が、釈尊の個人の名の代用となって、釈迦
といえは釈尊をいいあらわすことになったのである。ゴ
タマ・シッダルタという姓名のうち、姓のゴータマは父祖
伝来のものではなくて、釈尊が生れたときに、聖典のなか
から有名な姓を探してつけられたもので、いわば古聖にあ
やかつた個人の姓である。シッダルタという名は、勿論生
れたときにつけられたものであるが、これは「何事でも成
功する」という意味で、これを日本流に訳すと、義成とい
う名になる。

釈迦族の国 釈尊の生れた釈迦族は、現在のネパール国
の南部に位置し、霊峰ヒマラヤの南のふもとにあつて、大
きさは日本の千葉県ほどで、豊かな農業国であつた。釈迦
族はこの国を支配する貴族であつて、十城十家に分れ、貴
族共和国を結成していた。この十家のなかから一人の王を
選んで元首としてこれを王と称していたが、釈尊の父はこ
の王の地位にあり、首府のカピラ城に住していた。

この都城の跡は、今日でも明かにされて居り、ガンジス
河の支流であるラプチ河畔にあたり、風光明媚な、豊穰な

農耕地帯の中心をなす、美しい都であつたことが知られ
る。

釈尊の父母 釈尊の父は、浄飯王（シュドダーナ）とい
い、母はコーリ城の出で摩耶夫人（マーヤ）といった。

伝説によると、その当時は、長子は夫人の生家で産むの
が習慣となっていたので、摩耶夫人も長子を出産するため
に、カピラの城を出でて生家にかえられる途中、城外のル
ンビニー（嵐毘尼）という花園でしばしの憩いをなされ
た。時あたかも陽春で、無憂華（アソカ）の花が咲き競っ
ていたので、夫人はその美しさに見とれて、思わずその一
枝を手折ろうとされたとき、急に産気づいて釈尊の出生が
あつたといわれる。

釈尊が、母の右脇から出生し、生れるとともに七歩前進
して、「天上天下に我れ独り尊し」と叫ばれたという伝説
や、また、この時に天は甘露の雨を降して、この産れた童
子の身をきよめたという伝説は、すべて将来のこの比類な
き大宗教家の花の中の出生ということの、美しいよろこび
を讃仰して作られたものであろう。しかし、この親しみぶ
かい伝説も、人間としての最高の在り方である仏陀の自覚
の表白であつたとも言いうるのである。

また、釈尊は伝説的には、大王の太子のようにもいわれ

るが、前にも述べたように、ネパール南境の小貴族共和国で、王と呼ばれていた家の出身であった。この頃までのインドは、民族中心の小国分立時代であったが、漸く大国主義の時代となって、マカダとコーサラの二国が弱少国を統合して、または勢力下にいれて、二大国の対立の形勢をなして来たのである。釈迦族の国は、この大勢にたちおくれ、勢力国としてはコーサラに属していたが、おそらくは結婚政策などによって、ようやく国としての存在を保っており、全く時代に残された小貴族国であったとみられる。

しかしながら、釈迦族自身は、血統のうえからは、大国コーサラの王室よりも正しいものであると主張して、これを誇りとしていたといわれるが、釈尊はそのような血統の正しさを誇る釈迦族のなかでも、とくに宗家であり、王にも選ばれた家の長子であるから、のちの時代にみるような大国の太子ではないとしても、血統の正しい王家の貴公子であったのである。

釈尊の出生年代 釈尊の出世された年代について、日本では古来より三千年ほど前のかたであると言われていたが、インド・セイロン・ビルマ・タイなど東南アジアの仏教諸国では、一九五六年から七年にかけて、それぞれ仏教紀元二千五百年祭を盛大におこなったが、これは仏陀の勝利

(ブッダ・ジャヤンティ)の祭典と呼ばれている。仏陀の勝利というのは、釈尊が三十五才で真理を悟られて、仏陀となられたのを紀元元年として、それから二千五百年になるというのであるが、確かな根拠はないようである。

インドでは、歴史上の記録がほとんどないので、歴史上の釈尊の出生された年代も定め難いものになっているが、今日では、唯一の手がかりとして、仏教を信奉した、阿育王(アソカ)についての記録を基として計算するのである。

これにも二つの説がある。第一の説は、阿育王の即位された年を紀元前二六六年として、これをセイロンなどの南方仏教に伝える記録に従って、阿育王の即位は釈尊の入滅から二一八年目であるとなし、釈尊の生存を、紀元前五六三―四八三年の八十年間とするものである。これは世界的に一番多く用いられている計算であるが、これに対して、第二の説は、宇井伯寿博士によって算定されたもので、阿育王の即位の年は、紀元前二七一年であるとなし、これを北方仏教の古い伝説によって計算すると、この年は釈尊の入滅から一一六年目になるとして、釈尊の在世年代を紀元前四六六―三八六年の八十年間であるとするものである。この二つの説の間には約百年の相異があるが、学術的には、第二の説が精密であるとされるが、なお異論があろう。

釈尊の生れた日については、中国や日本では、花まつりで知られる四月八日と伝えられているが、セイロンその他の南方諸国の仏教では、釈尊の出生も、悟りの日も、入滅も、ともに五月の満月の日であるとしている。そして、五月は、日本や中国のお盆のように、仏陀の祭典が官民をあげておこなわれるのであって、これを五月祭（ウェーサカ祭）または仏陀祭と呼んでいるのである。日本でも、近年国家としても、仏教としても、南方の仏教諸国との交流が繁くなったので、ウェーサカ祭がおこなわれるようになったが、しかし、日本仏教としては、釈尊の誕生日は四月八日であるとしていることに変わりはない。

二、出家

釈尊の生長 釈尊には生後まもなくふかい不幸がおとづれた。それは、七日目にして母摩耶夫人が喪ったのである。おそらく産後の病いをえられたのであろうが、釈尊の養育は、直ちに摩耶夫人の妹である、波闍波提（ハジャハダイ）が第二の母となり、王夫人の地位について育てることとなった。波闍波提は、大愛夷母と漢訳されるように、まことに慈愛深く、釈尊の養育には、完全した母性愛をそそがれた。そのため釈尊の幼少の成長には、実母をうしなった暗いかげは全くみられない。

当時、釈迦族は衰運にあったので、軍事と政治とに優れた大英雄の出現をのぞまれていたのであるが、釈尊の教育も、この釈迦族の希望にこたえるように努力された。青年時代の釈尊もまた、それに応ずるように、武芸にすぐれ、知識も秀でていたといわれる。十九才にして、同族の美しい姫である耶輸陀羅（ヤソダラ）と結婚したのであるが、これは、当時の武士階級の風習に従って、同族の青年達と武技を競い、優勝をかちえて得られたものと伝えられる。やがて、一子羅睺羅（ラーフラ）が生れると、突如として出家して宗教界にはいることとなり、釈迦族全体に大きな驚きと失望をあたえることとなるのである。この羅睺羅の出生は、結婚直後であって、その子が少年に達したから、出家したのか、あるいは結婚後十年近く経て、ようやく男子が出生したので、それを機会に出家したのか明かでない。ふつうは子供が生れたので、直ちに出家したと解されているが、しかしおそらくは、子供が少年に達したので出家したのであると考える方が自然のようである。

出家の動機 釈尊が出家して宗教界に入った動機についてみると、釈尊の生きた社会的事情は、出家を促すいくつかの条件があった。それによると、釈尊の出家入道は、後世の中国や日本の出家入道とは、全く異った意味のものの

ようである。伝え信ぜられているところによると、釈尊は、十一才のとき、父とともに農耕祭に臨んだが、このときに鳥が小虫をついばむのをみて、生命のはかなさを感じとり、宗教心をつよめた。出家求道のところを見た父王は、その心を世俗に止めようとして、春夏冬の三時の宮殿を作り、かぎりない歡樂をあたえ、世間の苦を知らせずに、出家の念をおこさせないようにしたといわれる。

しかし、当時の教育は、インド・アーリア人の宗教聖典を、宗教者の波羅門が講ずることが主であったから、ものを見るのに宗教的な関心があっても当然であるし、また三時の宮殿にしても、当時の貴族はふつう三時の別々の住居をかえて生活するのが常態であったとも伝えられている。従ってまだ十一才の少年である釈尊に、出家の心をおこさせたなど見るのは当を失していると思われる。

また、釈尊が出家するに至った直接の動機として、四門の出遊ということが言われる。それは、釈尊が太子として久しく宮殿の奥深い生活をしていて、世上のことを知らなかったが、一日城外に遊ぼうと従者をともない、東門を出たとき、ひとりの齒のぬけ身色の衰えた、白髪の老人をみて、世の老苦を知った。そののち、同じようにして、南門から出遊したとき、病みおとろえた病人を見、西門では、

人びとの悲しみのなかに死人の葬るのをみて、人生に老、病、死のまぬがれがたきを知って、厭世の念をつよめたのである。所がそののち、さらに北門を出遊して、そこに出家沙門が法服して、乞食のための鉢をもって安祥として行歩するすがたをみて、それが生死の畏れを脱れた宗教者であることを知り、出家の志が生じたというのである。

この伝説は、南北仏教にひろく伝承されているものであるが、これは後世の作りあげられた伝説であろう。けだし、老病死は、人間に当然ありうるにもかかわらず、人間がそれを畏れて苦とするのは何故であろうか、またそれを脱するにはどうすればよいのであろうか、ということは、当時の宗教的な問題であった。釈尊もまたこれを解決しようとして出家したのであるから、その意味を、かかる伝説に組みたてたとみれば、その意義も認められるが、しかしこの伝説を史実とみることは出来ない。宗教家を家庭教師とした釈尊が、人間に老病死のあることを知らなかったとはいえないし、また、まったく世間と断ぜられた、深窓の生活ばかりではなかったであろう。おそらく、釈尊の出家については、当時の若人たちの挙って思想界にむかった、時代の傾向を主として考え、また釈迦族の政治上の状況をあわせて考える方が合理的であると思われる。



学会 パ ッ デ

マンモス宗教まかりとおる

——創価学会の生態——

浄土宗教学院

新興宗教研究班

一、世はマンモス時代

東京タワーが三縁山増上寺を前景として空中にそそり立ち、海には、四万トンの大タンカーがしぶきを上げて走る。世は挙げてマンモス時代である。当り前のもの、平凡なものには、もう倦き倦きして来た。何か、どえらいものはないか。何か、どでかいことをしたい。そういった気持ちが反映してか、ビルにしても、船にしても、クリスマスのデコレーションにしても、とに角、馬鹿でかいものが人気を集めるようになった。

もっとも、偉大なもの、巨大なものにあこがれる気持ちは、今に始まったことではな

徒の数の多いもの程、その中心になるものは巨大なもののようなのである。

く、動物の毛皮を剥いで体にまとい、棍棒を武器に野山を狩りして暮していた、太古の時代から、人間は、偉大なもの、巨大なものを尊敬し、崇敬し、これを神としてあがめて来たのである。そして、このような、人間のあこがれは特に宗教の世界に多くみられる。京都の東西両本願寺を始め、知恩院にしても、天理市の天理教の本殿にしても、その建物の規模は広大である。そして、思うに、諸宗教、諸宗派の中で、最も庶民的といわれ、信

東京タワーが出来たばかりに、折角戦後建てられた、増上寺の本堂も、馬鹿に小さくなってしまった。巨大なものにあこがれる、一般庶民のあくことのない欲求は、増上寺の境内を素通りして、蟻の行列のように、タワーに吸い込まれて行く。この蟻の行列をみるたびに、「マンモス時代来る」の感が深まるのである。

コマージュの面で一般大衆の、このような「マンモス」へのあこがれを、巧みにとら

えたものが東京タワーであるとしたならば、宗教々団の名においてこれを敢えてしたもの、今、中野の本部に七億円の予算で会堂を建てている、立正交正会、開教七十年を記念して作られた天理教本部などであるが、それにプラス・アルファして更に巨大を目ざして躍進しているのが、創価学会という名の「マンモス宗教」なのである。

二、参院選挙が語るもの

昭和三十一年に行われた参議員選挙に全国区四人、地方区二人の候補者を立てて、その半数（全国二人、辻武寿、北条衡八、地方区一人、白木義一郎）を当選させ、可成りの数の地方議員を出した創価学会。今度もきっとやるだろう。と、あらかじめ予想はされていたが、蓋を開けてみて、今更ながら、「これ程までに」と世の常識人を驚かせる結果が出た。何故だろう。そして、これは一体どういうことになるのだろうか。

数字が並んでいささか、話が固くなるが、この疑問に答えるために、公平な目で、状況分析を試みることにしよう。

まづ選挙の得票結果からみてみよう。前回の参院全国区で四人立てて二人当選させた時の票数は九十九万票、今回の全国区五人の集めた票が二百四十八万余票、二・五倍強である。その内わけは、他の仏教関係者の得票を含めて、次の通りである。

氏名	順位	得票	後援教団別
前田 久吉	四	六六〇七	立正交成会
石田 次男	五	六六〇三	創価学会
赤松 常子	一二	五五〇三	西本願寺系
中尾 辰義	一四	四四七三	創価学会
小平 芳平	一五	四四八三	"
原島 宏治	一九	四二〇三	"
北畠 教真	二一	四三三三	西本願寺
牛田 寛	二四	四〇九五	創価学会
大谷よし雄	三二	三五五七	東本願寺
山本 すぎ	三六	三九六二	仏教婦人会

前田久吉は産経新聞会長として報道関係経済関係の票も可成り入っていることであろうし、交正会の統一候補でもある。その得票は創価学会候補の分割票に比例すれば多分に割引いて考えられねばならぬ。従っ

て、仏教関係の第一位は創価学会の石田ということになる。また、東・西本願寺が世に誇る教団組織網を以ってして得た票数も、創価学会の各候補に比べると貧弱である。更に、全仏教関係議員十名の中で五人を占めている



大石寺大講堂

ことは、日本の仏教の政治勢力の半分を代表するといわれても何ともいえぬ数である。

前回、東京地方区から出て次点になった柏原ヤスの勝績は更に華々しい。

柏原ヤス 一位 四七一四七二

市川房枝 二位 二九二九二七

と約二倍の票で悠々と当選している。

ジャーナリズムでは、この柏原の驚異的得票と、全国区全当選の成績の神秘の謎をとことうとして、ラジオ、新聞、週刊誌総動員で騒ぎ立てたわけである。謎の解き方には色々あったが、帰するところは、組織票と折伏票（世間では浮動票という）の二つに絞られたようである。

三、組織票

組織票の強みは、創価学会の組織統制がすぐれており、社会党のように末端（各有権者）が遊離しておらず、本部と末端会員とが一筋に固く結ばれていた点にある。何故このように固く結ばれていたかという点、これには二つの理由がある。その一つは、他の政治団体のように、単なる政治的イデオロギーと

か、政策上の理論とかいった、言葉の上だけの結びつきだけでなく、信仰という筋金を通じて、実際の生活指導を手段として、現実具体的にしっかりと結びついているのである。

この点は、既成教団の寺院と檀家という封建的關係とも異つた、血の通つたつながりというべきであろう。他の一つは、他の宗教政治家のように、観念的な、来世的な教義に立つのではなく、現世的に、罰とたたりを打ち出して来るので、人情としていや応なしに結ばれてしまうのである。特に、政治のように現実問題が中心となる場合、来世主義に立つ既成教団の者と、現世主義に立つ創価学会とではその政見の述べ方に少なからぬちがいが出て来るのは当然であろう。

こうして組織票が或る程度確實である上に、教団統制の上から、その票割りが巧みに行われたことは見のがせない。

全国区では五人の候補の票を五つの地区に配分している。勿論、各人の地方的特色を生かしている。

石田次男（九州統本部長）中国・四国・九州。

中尾辰義（大坂船場支部長）三重県以外の近畿各県。

小平芳平（教学部長）岐阜・富山・石川・神奈川・静岡・山梨・長野・愛知・三重。

原島宏治（統監部長）東京・千葉・埼玉・茨城。

牛田寛（青年部長）北海道・東北六県・新潟・群馬・栃木。

票割りの結果、各人が最高票を得ている県は、石田・福岡、中尾・大阪、小平・神奈川、原島・東京、牛田・北海道となっている。まさに、割当て通りの結果である。

柏原の東京の票はどういう結果かというと、東京の固定票十五万、学校教員（特に小学）と下町婦人層の浮動票及び十五万信徒の勧誘票三十二万、計四十七万といわれている。次位の市川房枝がキリスト教系で、インテリ層の支持をうけ、大田（旧大森住宅地帯）世田谷、杉並及び武蔵野、三鷹等で得ているのに対して、柏原は大田（旧蒲田工場地帯）江東、品川、北、板橋、足立の各区及び八王子、三多摩の順で得ている。ここにも、教団勢力の配置図がうかがわれるのである。

四、折伏票

今度の参院選挙は、自民・社会両党対決の戦いだと言われた。そして、この気配は既に前回の選挙の後に漂っていたといわれる。お互いに相手を喰うと同時に、浮動票をねらうのは当然である。そこで、自民党では、社会

党が勤労者階級の労働組織を持つのに對して、資本・中小企業の非組織体では心細く何か、しっかりした組織体を持つものをつかもうと意図した。比較的強固で、而もうるさくない組織を持つ、既成仏教々団、特に、浄土真宗が、早くからその目標となっていたことは周知のことだが、前回の成績は余りかんばしくなく、組織自体も昔日の強さを失っている。無論ないよりはましだが、もっと確実なものは、と見わたして目星をつけたのが創価学会である。保守政党と宗教々団との結びつきは、日本政界の古くからの慣習であるが、近来では、特に政党の教団利用が目立って来ている。昨春の大石寺の大講堂竣工にはさすが総理大臣は代理だったが、他の大臣や都知事その他が参加した。戸田会長の葬儀には岸

相始め多くの現職大臣が焼香した。もう、選挙運動は始まっていたのである。こうした、創価学会抱込みは、結局、社会党の得票を出来る丈け横流しさせようとするもので、いわば防波堤の役目をやらせたわけである。

創価学会の会員は、本部自体の発表でも、昨年十一月で百万世帯、参院選挙当時で百万世帯といわれる。無論この数は割引いてみられねばならぬ。今まで調べられた結果では、新興教団の信徒数は例外なしに水増しされておられ、生長の家が六〇パーセント、交成会で三〇パーセント、創価学会で三五パーセントが浮動信者であるといわれる。従って、百万世帯と称する創価学会の固定会員は多くみても七十五万ということになる。そこで算術になるのだが、七十五万の固定会員の創価学会が、何故二四八七九五票を獲得したか。二四八万割る七十五万は三・三となる。一人の会員が自分を含めて三・三票づつ投票したことになる。そこで、噂されたのは、会員の折伏選挙運動ということである。一票獲得すれば一年間無事安穩、投票した者も同じく。すすめられて投票しなかったり、棄権し

たりすると仏罰できめんという戦術である。しかも、この戦術が折伏即ち布教運動として行われるのだから、戸別訪問しても違反にはならない。座談会、研究会と称して毎日のように集って、地域候補の名前を会員の頭に刻み込む。一方、立候補者は全部文化庁指導員という肩書を貰って、自分の割当て選挙区で、大ぴらに宣伝をする。選管委では、ただアレヨアレヨと見ているばかりである。全く以って手のつけようがなかったというのが実情であった。その上、違反で捕っても、それは個人が自発的にやった、信仰上の行為だからというわけで、本部は「公明選挙だ」と涼しい顔。

折伏という名の選挙運動が、今回の勝因の大なるものであったことは、以上を以って知ることができよう。

五、マンモス病の解剖

両国の旧国技館や後楽園球場、その他の人の目のあるところに、数万という大衆を集めて大集会をしたり、大石寺境内にマンモス講堂を作ったり、とに角、「数」と「大きさ」の

宣伝に事日ない創価会学が、事あるごとにふくれて行くのは、今の日本人が「マンモス病」にかかっているからである。

巨大なものに魅力を感じるのは、人間の心情として生れつきのものようであるが、これを分析してみると、そこには、満たされぬ欲望の変形された満足ということがいえる。

元来、百姓や貧民のための救済を標榜しておこった真宗は、その本山は無論のこと、末寺一つ一つをみても、実に荘大な伽藍を誇るのは何故か。現実・日常の生活が低く、貧しい人々程、せめて理想の世界では荘大なものを強く希望する。都会のデパートが益々巨大になるのも、零細な庶民のひとときの夢を満たすからである。人々はこうして、自分丈けでは達せられぬ望みを、大勢の力の結集のうちに満足させようとする本能を持つ。ことに近來のように、独占大資本主義の時代になると、個人の力——経済力を含めて——はささいなものとなり、いくら努力しても、昔のような大成功者にはなり得ない。必然的に夢を抱いて、その夢の中で満足せざるを得ない。マンモス宗教は、このような庶民の信仰欲

求の上に、大あくらをかいて、ますます巨大になって行くのである。

政界に躍り出て、国会をまかりとおる「マンモス宗教」はたして何処へ行く。

日本靈異記より

禪師の食べようとする魚が化けて

法華経となり俗人の誹を覆した話

吉野の山に海部峯という名の山寺が有りました。阿部天皇の御代に一人の偉大な僧

後迄見届けてやろうと考え、ひそかにいつて行きました。

がそこに住んで熱心に修行をしていましたある時体が大変弱り切って起きる事も出来なくなりましたので、魚を食べようと思ひ弟子にその旨を告げました。弟子は早速紀伊国の海辺に行き、新鮮なボラの小さいのを八匹買って小さな櫃に入れて帰えり掛けますと、その途中知合の檀家三人に遭い何を持ってるのかと聞かれました。これは法華経だと答えましたが、持ってる櫃から魚の汁が垂れてその臭いこと正に魚の匂いです。だから檀家達は「お前の持ってるのは経でなく魚だろう」とせめ、弟子が「魚でなく絶対経だ」と言い張るのに無理に蓋を開けさせ様とするのです。弟子は遂に拒み切れずに開けますと魚八匹が法華経八巻に

山寺に戻った弟子から禪師はそれを聞き不思議がったり喜んだり、きつと天の守護に違いないと考え乍らその魚を食べました。俗人はこれを見て、身体を地面にひれ伏し、禪師に白状して「本当の魚でも聖人の食物になつては法華経に変わるとは。私は愚かで邪見で因果の理法を知らず、お弟子さんをせめて悩まし困らせてしまいましたどうぞこの罪をお赦し下さい。これから私の師匠として心から敬い御供養申し上げます」と言い、大いに寺に助力する檀主となり、禪師を供養したとの事です。仏法の為に身を助けるのならば、魚肉を食べても破戒にならず、魚は化けて経となり、天は感じて物事を順当に運んでくれます。(Y・S)

近代高僧伝

道重信教伝



一見不精ひげをのぼし、百姓然としている
とはいえ学徳兼備の高僧、この人こそ僧侶と
して始めてマイクの前に立ち、ラジオを利用
して法話をなされ、大僧正の身でありなが
ら、しかも人の止めるのも聞かず、自己の信
ずるところに従って、飛行機上の人となり、
散華供養という破天荒な捨身行を敢行された
道重大僧正であった。

福原氏一万三千石の城下宇都の町に上人が

孜々の声をあげられたのは安政三年三月四日
のことであった。父は道重十次郎、彼は謙徳
をもって知られ、七人の子女の親として、子
供たちの教養に常日傾心をくだいていた。中
でも辰之助は人並みすぐれて聰明であった。
これを聞いた松月庵の小田信立が人を介し
て、松月庵に弟子入れをすすめたところ、親
も子も異存なく出家を喜び、明治元年七月十
三才で仏門の人となった。辰之助こそ後の道
重信教の幼なき頃の名なのである。

松月庵は万治三年（一六六〇）時の宇部藩
主福原広俊が、元俊の二女で毛利秀包に嫁し
た人の冥福をとむらわんがために建立した寺
院であったから旧幕時代は権勢をほしいまま
にしていたが、御維新となり世が明治となる
や大改革が敢行され、経済も意の如くならな

かった。行燈にともす葉種油を買う金に事欠
き、食事と思うようにとれない日もあった。
寒中足袋をはくことも出来なければ、マフラ
ーを用うることも許されず、夜具は煎餅蒲団
が一枚だけで、それを二つ折りにして僅かに
寒さを凌ぐより外なかった。食事は麦飯ばか
りで、それも毎日炊くと薪が損になるという
ので三日分を一度に炊くという始末。使に出
される時、師僧は何時も線香で往復の時刻を
はかり、少しでもおくれると道草をくったと
いって大変にしかられたという。そのような
苦難のうちにも、勉学は一日たりともおろそ
かにはせず、人の寝しずまったあと、線香で
明りを求め、月の晩は本堂の縁側で明りをた
よりに勉学をすすめた。かくするうちに、漸
く時熟して明治五年十月山口講学場に入り、
山下現有・野上運海・伊藤無関・養鶴徹定・
岸上恢嶺について宗余乗を学び、学成りて後
一時柳井の浄名寺に寄寓して、ここにある蔵
書を片っ端しから読破していったのである。
信教の読書力は愈々増進し、浄名寺にあるこ
と一年半の間は誠にめぐまれた、学問するに
は格好の期間であったろう。

同八年浄土宗勸業に入り、全科を卒業するや十二年九月更に京都に赴き大教院に入学する、十八年十二月其の業を終えるや直ちに山口勸業の教師を拝命、松月庵に董住する事になった。以来山口支校、鎮西支校教授を歴任して、二十六年九月浄土宗学本校に赴任、三十三年十一月には仏教の民衆化を痛感し、在家の人たちに仏教の何たるかを教える学校をつくるべく企て、増上寺山内護国殿の別当寮に仏学院を創立した。上人四十五才の時のことである。

信教が増上寺の法主となられたのは大正十二年六月。九月一日には関東大震災があった、東都は火焰につつまれ、親を探して求め得ず身をもつてのがれる子供、目前の子を救うことすらできずに難を避くる親、夫に別れ妻をうしない、負傷に助けを呼ぶ声はいたいたしく、恰かも焦熱地獄のようであった。幸いに難をのがれた増上寺は一山をあげ、上人自から指揮して避難民の救済にあたられ、罹災民の集まる者一万人以上にも達したという。越えて十四年九月の大震災の三周忌を卜し、法会勤修を予定していた矢先、横浜市鶴

見総持寺に程近き潮田に飛行学校を経営していた片岡一等飛行士の訪問をうけた。

「上人様、未だ僧侶の方で飛行機にのられた方は一人もないのですが、一つ私の飛行機に乗られて、空中の様子を御覧になりましては」

「イヤ老衲も是非一度飛行機にのつて見度いと思っています。然るに今までは乗る機会がなかったのですが、あなたが乗せて下さるならば、いっそうのこと九月一日の震災の三周年の忌日にしてもらいたい。仏教の供養の方法に、散華のことがあるが空中から散華して供養するということは、この上もない追薦であります」

このような会話が交わされ、空中散華の問題は決められてしまった。散華の用意はととのったものの、この計画を聞いた人は、「若しも上人に万一のことがあっては」と、ひそかに中止されるよう忠告する者もいた。しかし「一旦自分の意志として社会に発表したことは、とりも直さず社会に対する公約事項である。その公約は万障を排しても果さなければならぬ。殊に今中途にして、このことを止

めるとなると、飛行機に対する恐怖からと世の人は見て、折角発達してきた飛行機に対し、沢山の人たちに危惧の念をいだかしむるようになっては相済まない。娑婆の化縁のつきるときは、たとえ飛行機にのらなくても畳の上でも死はくるのじゃ」と仰せられて、計画通り、十五万枚に及ぶ散華をたずさえて机上の人となり、たえず阿弥陀経をとえながら散らされたのであった。

これより前、大正九年夏のこと、富士登山をなされたことがあった。この時も六十六才の老齢の身を心配された人を尻目に「イヤ娑婆の化縁のつきるときは畳の上にもどいてても同じだ、此土の縁に恵まれてあれば無事に下山するであろう。若しかして富士山で命が終ったならば、東海道を上り下りの汽車の窓から、アレが道重の墓じゃと富士山を見て下され」と平然と物語られ、頂上をきわめ砂走の莊快を試みられて下山したという。

この上人も此土の化縁つき、昭和九年正月廿九日七十九才を一期に安養の浄土にお帰りになされた。法名は浄蓮社澄誉上人忍阿信教大和尚。

(大橋俊雄)



記 参 拜 場 靈 三 州 作

一 生 誕 御 の 丸 至 勢 一

仙 大 川 中

の門前に、竹本院、浄土院という二院があった。時国公の信仰篤きことは祖先以来の伝灯及環境にもよろうか。時国公は秦氏を迎えて御結婚された。秦氏の兄観覚得業は、天台の学僧にして菩提寺の住職であった。このような因縁を以て、夫妻心を一に信仰生活に入り、身心共に健全で家庭的に至極円満であらせられた。

岩 間 寺 (岡山県久米郡吉岡村)

よしやつえさかきにさせどたふとやな

さくらのなはなまことにぞさく

家庭は円満、健康に恵まれ、社会的衆望を一身に集めて居られる時国公夫妻は、信仰的に一子を求め、全身全霊を捧げて、当国第一の御霊場岩間山本山寺御本尊観世音菩薩の宝前に三七日参籠なさいました。

岩間寺は、誕生寺から山道六キロ、遠い所ではないけれども、案内者無くては行かれない。漆間僧正の御指示により案内者を得、岩間山本山寺御本尊観世音菩薩の宝前に至心に念仏申しました。昭和の御代山間僻地とはいえ案内者無くては行かれぬこの難路、八百五十年の昔を偲び、時国公夫妻の真剣な御態度

誕 生 寺 (岡山県久米郡久米南町)

ふたはたのあまくだりますむくのきは

よよにくちせぬのりのしのあと

昭和十六年五月、平壤華頂寺総代中田勘一氏と共に、岡山に着いたのは未明、快晴であった。中国線津山行にのりかえ、一時間半で誕生寺駅に到着。法然上人御誕生の地に、念仏の信者が多く参詣する所から早くから鉄道ができ駅名も誕生寺駅と名付けられた。駅を後にして約五百米誕生寺橋を渡り、間もなく

誕生寺門前に着いた。住職漆間徳定僧正に案内せられ、諸堂参拝宝物拝観いたし、御厚意に甘え、一泊いろいろとお話を拝聴した。誕生寺は漆時国公の館の跡に建てられたもので、境内地は祖先以来永く住居せられた所、御先祖は、仁明天皇の御後胤の系統、高貴の家柄であることが明かである所から美作国では、地方の人達は皆尊敬し、郷土の誇りとしていた。時国公は慈愛深く、人々の和合及産業に心を用い指導して居られた。当時館

を仰ぎ心から合掌いたしました。

近世教育学の先生は、満四歳になりましたが何時頃から教育を始めたかよろしうございましょうかと尋ねた母親に、それはお氣の毒に、四年と十カ月おくれましたと答えられた。

法然上人の御両親におかれては、未生已前の教育と申しましょうか、眞実信仰により、難路を越えて参籠祈願せられました。満願の頃秦氏、剃刀をのむ夢を見られたことを申し上げると、時国公は、定めし一子を授けられたお告げであろうとて夫妻一心に歓喜礼拝して、下山せられた。この時秦氏桜の杖のさかきのまま本堂近くにさし、一子育つように、この木も育つように心に深く念じて下山せられた。さかきの桜といわれ老朽した古木は別の堂に安置してあるも後に生いた桜は今を盛りと繁っている。遠近さかきの桜の故事を伝え親心を慕っています。

胎 教

間もなく懷妊せられ、夫妻心を一にして、身心柔和にかたく酒肉五辛をたちて朝夕三宝供養丁寧に、仏子をお育てするという深い信

仰を以て、生活のすべてに於いて敬虔にお過ごしなさいました。

実験心理学の証明する所によると、心の作用が身体に与える影響という实例に、心が平静の時身体中の血液は清浄であるが、怒る心の時身体中の血液に毒素ができる。又呼吸の場合も同様、怒る心の時、口から毒瓦斯をはきだす。

胎児發育期間は長い。胎教は母体だけでできる事ではありません。家族一同、仏檀を中心として、朝夕礼拝、三宝を供養し、御仏の照護を仰ぎ、合掌の心が一番大切であります。

庭 教

長承二年（一一三三）四月七日午の正中に秦氏なやむ事なく男子を出産せられ、時に紫雲天にそびえ、館のうち家の西に、もとふたまたにして、末しげくたかき棕の木あり、白幡二流とびきたりその木ずえにかかれり。鈴鐸天にひびき文彩日にかがやくと伝えられてある。参拝して、親しく、三代目の棕の木の繁茂しておるのを、又産湯の井戸の清水がこんこんと充ちているのを、又御母堂産室の跡

地に建っている御影堂を拝し、静に當時を偲び合掌いたしました。観世音菩薩から頂いた愛児は、大慈悲を体现せられるお方であるから、大勢至菩薩の智慧光を頂いて、悲智円満の尊いお方になられる事を深く御信仰ありて、勢至丸と名付けられた。

乳幼児についての御母堂の細心のお育てにより、御健康に御成長遊されました。母性愛は、愛児の健康を念じ、常に愛児の動作に注意し、排泄物をもその都度入念に調べ、母の栄養、睡眠、精神の平静等を反省せられる。離乳期から食事について特別な配慮あり、栄養上物質的事及び精神上の躰けに注意せられました。

近世医学上の実験によると、同じような犬二匹、与える肉の分量、解剖の時間等も同じようにして、一匹の犬はよく可愛がり、なでさすりながら与え、一匹は怒らせて与える。解剖の結果は、一はよく消化しており、一は消化していない。

勢至丸の御成長は、御両親だけのお喜びだけでなく、土地の人々も共に喜んでその御成長を祈っていました。当時は弓矢を用いる時

代であるから、段々弓矢のお稽古も始められ
そのお友達もできました。勢至丸の弓矢にお
ける技術の上達は著しく、小矢稚児と申され
評判高く、土地の人達も誉めたたえました。
勢至丸は群童の中に、勇氣以てその技を励ま
れる一面、毎日一人静に西に向い合掌して居
られたのであった。

父の遺言

勢至丸は、御両親の慈愛の下、平和に健康
で九歳の春を迎えられた。保延七年三月十八
日の夜、俄に御館の外は戦の騒ぎで覚められ
た勢至丸は、子供乍不意の夜討であると気付
かれ、外の様子を戸の隙間から見、平生用い
て居られた弓矢を持ち、敵の大将を見定め、
親思う誠心の一心こめて一矢を發せられた。
矢は大将定明の眼に当りました。定明は之が
証拠に、後難を恐れ直ちに逃げました。勢至
丸は母と共に父をさがしました。重い傷を受
け倒れて居られた。静に御居間におつれして
お手当をなさいました。勢至丸は、敵は見覚
えあるもの、成人になりましたら父の仇討を
いたしますと申し上げられた。時国公御遺言の
事を勅伝は、

汝さらに会稽の耻を思ひ敵人をうらむる事
なかれこれ偏に先世の宿業也もし遺恨をむ
すばばそのあだ世々につきがたかるべしし
かじはやく俗をのがれ家を出て我菩提をと
ぶらひみづからの解脱を求んにはといひて
端坐して西にむかひ合掌して仏を念じ眠る
が如くして息絶にけり。

と記されてある。勢至丸はこの悲しい父の最
期に心を痛め、涙止まらぬ中にもやさしい父
の遺言耳の底にとどまり心に忘れがたしと母
の許も受けて出家せられた。

菩提寺（岡山県勝田郡豊島村高円）

みてうえのいてふはふとしたかだかし
げにいきほひはそらにいたれり

誕生寺駅から三十五分津山着駅前から関豊
まで二十五キロバス一時間、更に山道二キロ
菩提寺門前に着、勢至丸のお手植の大銀杏が
門前に繁茂しておる。全長三十米余周囲二十
米余、天然記念物の指定ある保存木である。
本堂に参拝し、勢至丸のお木像に礼拝いたし
ました。勢至丸は出家してこの菩提寺に入ら
れた。前述のように叔父観覚得業は住職して
おられた。観覚得業は、勢至丸の心に深く同

扉の御法語

学生というのは、仏道を学習する者とい
う意味です。古くは学に従事する者という
意味で、現代の学生と同じようでしたが、
当時には仏典を学する者に限られ、いまだ
いう仏教学者の意味に用いられていまし
た。

「学生骨」と続けて読んで、学者らしい風
格を持ったもの、学者然としたものという
意味にとっている人があります。また「骨
になりて」をコチコチになったもの、もの
を形成する中心であり確固たるものの意味
にとる人があります。また更に理論一点ば
りの潤いのない意味にとる人もあります。

「学生骨となりて」を離して読んで、続
けて読んでも、又どのように解釈しても大
同小異で本来の意味から遠くはありません
が、やはり「いかに仏教学者らしくなっ
てしまつて」の意味がよいと思います。

仏道を学習するのに終点がある筈はあ
りません。論語読みの論語知らずというよ
うに学者らしくなったために、実はお念仏
を忘れてしまつていくということです。

この御法説は勅修御伝第二十一に出てい
ます。この巻は「上人つねに仰られける御

情して懇切に嚴格に指導せられ、勢至丸は真劍に研究と修行に励まれた。

勢至丸は十五歳の時比叡山に登り、四十三歳の時浄土宗を開き、念仏教化あらせられ、敵定明も教化を蒙った。

定明逐電のち隠居の心しづかにして已造の罪をくい当来の苦をかなしみ念仏をこたらずして往生の望をとぐ其子孫みな上人の余流をうけ浄土の一行をむねとせりと勅伝に記されている。

八百五十年前の社会状態は、仇討をするところが孝行の大切な行事と考えられ、又我墓前に敵の首を備えよ、無念であるぞと遺言したものである。こういう時に、勢至丸に遺言せられた事は誠に尊い事実であった。

新憲法發布せられた当時放送された中に、新憲法は、戦争放棄、武器廃止、平和を宣言している。之を歴史上の事実に見ると、法然上人の幼少の時、父時国公の遺言せられた事である。と詳細述べられた。

桑港に於ける平和會議の席上、セイロンの代表者は法句經の一節
まこと怨みごころは

いかなるすべをもつとも
怨みを懐くその日まで

ひとの世にはやみがたし
うらみなさによりてのみ
うらみはついに消ゆるべし

こは易らざる真理なり
を引用して平和実現への心構を迷べられ、
各国代表皆拍手せられた。

御両親靈廟

菩提院殿源譽時国西光大居士

保延七年三月十九日父君四十三歳

解脱院殿空譽秦氏妙海大姉

久安三年十一月十二日母君三十七歳

久安三年、勢至丸十五歳二月十三日母君に別れ比叡山に登られ、其年十一月十二日母君の悲報を聞かれどんなにか悲しまれたことであろう。やがてこうした因縁によりて、真劍に父の遺言を実現するため邁進せられ、遂に仏教の開眼、浄土宗を宣揚せらる事になった。

詞」を集めたものです。上人が特に誰にと
いうことでなく、しばしば申された御詞
で、弟子たちにとって耳なれた懐しいお詞
ばかりです。従ってこれらのお詞ばを、何
辺も口ずさんでいると、上人のお肌にふれ
るような温みを感じます。

さて、この御法語を拝誦してハッと感ず
るものがないでしょうか、最近田舎に住む
人々にとって、甚だ迷わざるを得ない学説
が、一流学者の発表として伝っています。
学問の上では正しいに違いないのでしょう
が、今の風習や感情とは程遠い説なので
す。

そのためというわけではありませんが、
扉の御法語を誦して、上人から激しく厳し
くお叱りを受けたようではありません。近来
は特に理論ばかりでもあり、各世代とも理
くつばっています。ここに信仰の薄れて
ゆくものがあるように思われます。

学問は大切ですし、学説は尊ぶべきもの
であります。だからと申して「念仏や失は
んずらん」の御注意を一刻も忘れてはなり
ません。あくまでも上人の指針に従って学
び、且つ生活しなくてはなりません。上人
のお詞ばは一つとして生活の上に立ってい
ないものはありません。そして凡人をあく
まで捨てず温かく抱いて下さっています。

抹茶々碗とお念仏

希有妙好人 隈田 二郎氏



福 富 海 缶

◇椎尾博士の教化を受ける◇

隈本氏は十六才にして彫刻家を志望、そうして今から十九年前廿七八才の頃東都に出て北村西望氏の門下生となり、喜多武四郎氏の紹介で椎尾博士の講話を聞かれたのが教化に浴せられるようになったその始めであると申されています。爾来牛込の専念寺や麴町の心法寺等で講話のある度毎に殆んど欠かさず拝聴されたといえます。けれどもその講話を聞けば聴くほどその意を把握することができなくなり、八カ年位たった或る日、

「先生、私はどうしても先生のお話を理解することができません。講話を拝聴して

いる時は多少分ったようですけど、家に帰って見ると矢張駄目です。」

「そうですか、お分りになりませんか。お分りにならなければ分らんでもいいですよ。兎に角念仏を申して見ませんか。私に騙されたと思って念仏しながら仕事をしてみて下さい。仕事をしながら念仏するのでなく、念仏しながら仕事をするんですよ。」

それから下宿に帰って念仏を始めたのが、今日希有の妙好人になられるもとであったと云って、隈本氏はいつも博士に深い感謝をしておられます。

◇制作品に変化が起る◇

そうして熱心に念仏しておられると不思議なことには自分が制作している作品に変化が起って来て、今迄で自分の力で何うしても到達することのできなかった末到の世界が開かれて来たのであります。それが何故であるか自分には分らないが、兎に角自分の作品に変化が起って来たことは事実である。併し或は自分の錯覚であるかも知れないので、恩師の西村先生や高村光太郎先生に作品を観て戴い

たところ、これは普通で出来る作品ではない。お念仏を唱えて制作したと言われるが、それは恐らく事実であろうといって、証明して下さったそうである。

そのことがあって以来、全く夢中で大声で念仏するようになり、それが毎々日日続くので、下宿からは嫌われ、隣室からは文句が出るといった始末であったと申されています。

◇観音堂に籠る◇

それからやがて太平洋戦争が勃発し故郷である唐津に疎開しなければならぬ事情になり、自分の家で念仏することが不自由なところから、とうとう三十年八月に自分の所有地の一角に小さな観音堂を建て、念仏すること、名号を書くこと、制作することだけに専心し、朝から晩まで五時間乃至九時間、一日の日課念仏の数六万七万、殆んど一日として休むことなく今日に至っている。そうして昭和三十一年には山本空外博士の五重相伝を受けられ、その信仰は層一層深さと正確さを加えるに到ったのである。

◇創価学会幹部との問答◇

かくて隈本氏のお念仏は近所の評判とな

り、廿二年の或る日、近くに住む学会の幹部が突然来訪し、

「貴下は朝から晩まで毎日念仏しておられるようですが、折角信仰されるなら架空の念仏を申されるより、有難い妙法蓮華經を唱えなさい。妙法蓮華經は蓮華そのままが実であり結実ですから、唱えればすぐ効果が現われて来ます。失明された方の眼があき、足の立たなかった人が立つようになり、事業に失敗されていた方が妙法の信者になってから成功されていますよ。」

「ああそうですか。しかし君達は御利益があつたあつたといって盛んに宣伝されますけれど、事實は却って失敗した人もあり悪くなっている人もあるのに、その失敗した人、悪くなった人のことは全く隠して、成功した善くなったただけ宣伝して廻られることは甚だ不徳ではないですか。私は南無阿弥陀仏のことも、南無妙法蓮華經のこともよく分りませんが、お念仏を唱えればそれがそのまま仏の本願の念仏になっているのですから、この事實を信ずること以外何を信ずることができるのでしよう君達はそ

れは空念仏だといわれるでしょうが、私は南無阿弥陀仏と唱える声だけが真実でありその声にだけしか生命を感じることができません。いくら南無妙法蓮華經と唱えてもそれには生命を感じることができません。」

「生命とは何ですか。」

「生命とは何ですかとお尋ねになる位ですから、恐らく君達には生命は見えないでしょう。念仏して生命が見えるようになれば、この空気の中に生命を見ることが出来ますよ。」

「空気が見えるというのはあの雲のことですか。」

「いいえ雲のことではありません。私に見える生命が君達に見えないということは一体何処から来たのでしょうか。その理由は何でしょう。生命は単に見えるだけでなしに声も聞えて来ますよ。君達が架空だ、架空だといっていることは仏を見たり聞いたりすることのできないことは勿論、結局それを信ずることができないからですよ。一体妙法蓮華經とは何ういうことをいうのですか。」

「妙法とは経にある蓮華の如く解脱することであって、その実はいつまでも栄えるという意味です。」

「君達の説明を言葉通り聞くと「実」が非常に尊いということであるが、現在では世の中がだんだん進歩して来て実のない西瓜や蜜柑などがあるが、あれは何ういうことになるのでしょうか。私は戸田城聖氏が唐津に

来られたら一度お会いして質問したいと思っていますから、案内して来て下さいませんか。私は浄土宗のお念仏だけで沢山ですから、学会に入会する意志はありません。お断り致します。実際仏教は一つしかない筈ですから、君達の方は南無妙法蓮華経、私の方は南無阿彌陀仏、それでよいではないですか。南無阿彌陀仏と唱えれば即座に仏の来迎を受け、言

葉にも声にも仏が出られるのですから、それを信ぜずして何を信ずるというのでしょうか。全く即座に待ったなしで、この声も、この手も全く南無阿彌陀仏一本になり切るのです。かくてこそこの唐津焼の抹茶々碗も絵にも生命が現われます。実に有難いことであり

尊いことです。」

程法然上人の偉大さが尊さが理解され感謝の言葉もありません。而かも拝読していると自分分は上人の直弟子の如く感ぜられ、そのお慈悲の深さに感泣せずにはおられません。その中でも特に有難く感ぜられる御法語は、

「善人は、善人ながら、念仏し、悪人は、悪人ながら、念仏して、ただうまれつきの、ままにて、念仏する人を、すけささぬとは云ふ也。」

「この外に、奥ふかきことを存せば、二尊のあはれみにはずれ、本願にもれ候べし。」

◇御法語に対する深い悦び◇

隈本氏が朝に夕に拝読して非常によろこんでおられるのは総本山知恩院版の「元祖大師御法語」です。自分の生涯の救いであることは勿論、子孫の末に至るまでの救いであり至宝であると申されています。拝読すればする

等であると申されますが、それはどの御法語が有難くて、どの御法語が有難くないということではなく、同じ御法語を何回拝読しても少しもあきが来ず、益々有難くなり深くなる一方で、法然上人の偉大さが如何に大きいかということ想像することさえできなくなります。全く世界一の大聖者でなくて何でしょう。その御苦勞の程が深く深く拝察されます。今迄自分が唱える念仏の如くのみ感じていた私が、「彼の仏の願に順ずるが故に」という上人の御法語を拝読して、お念仏の何た



るかが始めて理解せられ、南無阿弥陀仏と唱えさして戴く声そのままに、仏の来迎をお受けして目前に如来様を拝ませて戴くことができるということは何という大きな感激でありよろこびでありましょう「一念に一度の、往生をあておき給へる願なれば、念ごとに往生の業とはなるなり。」全く如来の本願の念仏なればこそであります。如何なる聖者が「彼の仏の願に順ずるが故に」というが如きお説教をして下さった方があるでしょう。その御本願から毛筋一本程でも相違しては最早真実ではなく生命は失われて仕舞う。釈迦の本懐、諸仏の護念一に弥陀の本願なるがためであるからであります。

◇芸術の真境開かる◇

かくて隈本氏の芸術の真境がお念仏によって遂に開かれたのである。芸術の純粹性、真実そのもの、生命そのものが、ただ一向に念仏するだけで、何等求めることなしに自得せられたのである。求めても求めても求むることができなかつたものが、不求にして自得せられるということは何という不思議なことであらう。自分で追求することは自力聖道門で

あるが、念仏して不求自得せられたことは他力浄土門である。自分の念仏では往生するとはできないが、御本願の念仏は身心共に全く南無阿弥陀仏一本になりきるのである。その手が阿弥陀仏の御本願のままに動くのであって、その動きは生命そのもの、従って真実そのものである。念仏すれば芸術の純粹性である真実そのもの生命そのものが一切の上に認識される許りでなく、この手によって作品として実際に表現され制作されるということは一に法然上人の御蔭であると感激し感謝する外はない。氏の作品である唐津焼の抹茶々碗は近く福岡市の玉屋百貨店に於いて個展が開かれることになっているが、この三月来唐津された山本空外博士も、その作の尋常ならざるを見て激賞し、進歩の速かなるを見て驚かれたのである。氏は来る昭和卅六年の元祖大師の七百五十年までには、法然上人の御像を是非謹製したいと念願されている。筆者は氏が念仏三昧中の作品である清浄無垢の抹茶々碗が実費程度で頒布されることを希望しています。

(童)(心)(仏)(心)

おいしいトマト

A君とB君は、汽車に乗って海水浴に行きました。

その往きの車中での事。二人は持って来た風呂敷を広げました。そして、A君はトマトを、B君はバナナをそれぞれ取り出しました。

「B君。トマトをあげよう。」

「いいよ。ぼく。トマトはきらいだ。それより、ぼくのバナナをたべなよ。この方がおいしいよ」

「ありがとう。でも、このトマトは、けさ家の畑からもぎとって来たばかりだよ。ぼくとおかあさんが面倒をみて作ったんだ。」
A君は、ガブリとトマトにくいつきました。バナナもおいしい。トマトもおいしい。けれども、トマトの方が愛情がこいように思われました。そう言えば、A君の顔はトマト色。B君の顔色はバナナ色でした。

(淵)

維摩經

——經典解説（五）——



釈尊入滅の後、しばらくして、仏教教団には、仏教を狭い僧団から開放して「大衆のもの」としよう、という新しい動きが起ってきた。この新しい動きを大乘とよぶが、それまでの保守的な上座部系統の人々の主張では、家族と別れ、財産や地位を捨て、社会人としてのあらゆる権利と義務を放棄して教団に入り、教団の規律をよくまもって修行に専心しなければ、仏教の最後の理想に達することができない、というのであったが、大乘の系統の人たちは、仏陀の教えが教団の狭い枠の間だけに盛りきれものではないことを意識して、仏陀の教えを信じていても、社会生活を放棄して出家するまでに徹底することのできない人

たちは、信者となることを宣言し、信者として正しい生活を送り、修行にはげめば、やがて最高の理想に達することができると考えた。生きとし生けるものすべてが仏となる可能性があるというのが大乘仏教の基本的な命題である。大乘の經典には、このような家庭生活をしながら仏教を深く信じている居士の話が多く出てくるが、この「維摩經」に出てくる主人公の維摩詰も在家の仏教信者であり、とくに、この經典が他の經典と趣きを異にしているのは、この維摩居士が仏教の奥義をよく理解している、上座部では理想的な人物と考えられていた釈尊の高弟たちが、維摩にこっぴどくやりこめられ、逆に教えられるところであ

る。中でも、智慧第一と称せられる舍利弗などはまったくひどい役割にまわって道化役のような形で出てくるのは気の毒なくらいである。

もっとも、「維摩經」は、他の大乘教典でもそうであるように、歴史的事件の正確な記録というよりも、むしろ文学的な創作であり、維摩という理想的な人物をもうけて無限の力を与え、大弟子たちの偏見を論破することによって、大乘の教義がすぐれていることを示そうとしたので、舍利弗がこのような割の悪い役を引受けるほかなかったであろう。

「維摩經」は維摩居士が病氣になったときに見舞に來た仏弟子の文殊と維摩との問答をまとめたものである。まず維摩という人はどんな人かというと、ガンデス河の支流ガンタキー河の東岸にあるヴァイシャリという町に住んでいたリッチャヴィ族の大商人であった。一見したところ、平凡な家庭生活を営み、あたりまえの人間として何ら変りもないが、実は過去の多くの生涯において無数の仏陀に仕えて修行し、努

力を重ねてきたので、智慧といい才能といい心境といい実際のところ仏陀に近いくらいで、とくに大乘に心を傾けている。財産を無尽蔵にもっているが、それは頼りどころのない貧乏人を救うためである。戒律を嚴重に保ち品行の上で非の打ちどころがないが、それは不品行の人々に対して模範を示すためである。自ら精進努力して怠け者を戒め、智慧が明朗で愚かな人々を指導する。賭事や博奕をやっている場所に姿を現わし、勝負に夢中になっている人たちに気軽に話しかけて巧みに指導する。このような財産も教養も人格もすべて備わっているが、自ら超然とお高くとまるようなことはなく、あらゆる人から尊敬されている。仏教の人生観の上に立って人々を指導して仏道に入らせることを念願としている。

仏道品で文殊が「菩薩は仏陀の法をどのように実践するのか」と問うたのに対して、維摩は「菩薩が道ならぬ道を歩むとき彼は仏法を実践するのだ」と答えて「道ならぬ道」を説明する。菩薩は五逆罪を犯す境遇にあっても、害心を抱かない。悪魔の

仲間に入っても、実は仏陀の法のみ専念している。涅槃の中にありながら、絶えず生死流転を続ける。これを称して「菩薩が道ならぬ道を歩む」というのである。

菩薩はどんな悪い条件のもとでも衆生の救済のために努力を続けるのである。いやむしろみずから進んで悪い条件の境遇に入って行き、しかも悪を克服し、とらわれることがなく、大いなるいつくしみによって活動する。前に維摩という人物について述べたことが、実は、すべての菩薩の実践の道にほかならないのである。維摩とはこういう人で、これこそ大乘の理想的な型であることはいうまでもない。

このような大人物の維摩もある時、病氣になった。そこで、ありとあらゆる人が病氣見舞にやってくるが、逆に維摩から説教されてしまう。仏陀も彼の病氣を知つて弟子を見舞にやろうとなされた。そこでだれかを選定することになったが、諸大弟子たちは皆一度は維摩にやりこめられた失敗談をして、あのような偉大な人のところへ見舞に行くのはどうも、といって尻込みし

て、だれが行くかはなかなか定まらなかったが、最後に文殊師利が行くことになった。この文殊は「文殊の智慧」などといわれ、智識の化身のように考えられていた人で、そこに居あわせた一同は「文殊と維摩の問答ならさぞ見物だろう」というのでみな文殊の後についていった。そこで文殊と維摩の息もつかせぬ問答がはじまるわけである。

維摩が病氣になったというのであるが、ここにこの經典の説法のしかたの特色がある。

仏教では「方便」ということがよくでてくるが、維摩は方便の巧みな人であり、実は、法を説くために自分を病氣のように示したのである。

老・病・死は人間のもつ必然的な宿命である。釈尊は太子であつた頃にこの人間苦を痛感して、その解決を求めるために出家した。そして多年の修行の結果この問題を解決して仏陀となられたのであり、仏教ではこうした人間苦を克服することが出発点となっている。

維摩は病氣見舞にきた人に「人間の肉体は、移りゆくもの、ほろびゆくものである。このような病多い肉体を厭い、法身を願え」と教えている。といっても、これは

で達している。主人公の病氣を因縁として説法を進めてゆくところにこの經典が人を引きつける親しさがある。

病氣の身体なんか捨ててしまえという厭世的なものではない。病氣は自然現象で必ず起るものであるが、「人間に実体がない限り、その人間に関する病氣も固定した実体がないものなのだ。それにもかかわらずやれ病氣だとか死だとか心配しているのは『我』にとらわれているからだ」。虚心坦懐な気持ちになれば不必要な不安や分別がなくなるというのである。「老と病と死との苦惱制御する人を菩薩と名づける」といっているが、老・病・死を克服するというのは、病氣の本質、病氣が起ってくる原因、さらに病氣にかかる人間とはどういうものなのか、という根本的な真理を見極めることによって病氣を克服することが出来るというのであり、仏法の理をさとして、法の中に生きるということに他ならない。維摩と文殊の問答では、病氣のことから始まって、菩薩の理想である生死即涅槃という点にま

実生活に即してそこに仏道を見い出そうとするのが「維摩經」の特質である。ありのままの生活をしながら菩薩の行を實踐し生活そのままが真如のあらわれである。したがって仏道修行といっても、必ずしも人里離れたところに隠退する必要もない。道法を捨てざるままに凡夫の行をなし、煩惱を断ぜざるままに涅槃に入るのが坐禪である。真の仏道は必ずしも小乗の徒が主張するように俗世間を離れたところにあるのではなく、むしろ彼等が煩惱といい、惡業と称するものの中にかえって仏種を見い出すところにある。真の仏道は泥沼を利用して蓮を生ぜしめるように、煩惱に即してそこに菩提を見い出すところにあらねばならぬ、というのが「維摩經」の立場である。人間の心には色々な煩惱が起ってくるが、しかしその煩惱の内部に潜む意義（仏性）を見い出し、それによって心を指導し淨化するとところに真の理想生活が開かれるという

意味である。

「維摩經」はかなり早くから中国に伝わり、何回も漢訳されている。その中、もっとも広く読まれているのは鳩摩羅什の訳で、正しくは「維摩結所問經」といい、普通に「維摩經」といえばこれのことである。またチベツ語訳があり、サンスクリット本の失われている今日では、重要なものとなっている。わが国では、他の經典と異なつて特定の宗派の聖典として指定されなかったもので、禪宗では愛好する人もあつたが、どちらかというと、そう普及はしなかったようである。

(佐藤 成順)

會員各位にお願い

- 1 會員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

徳川家墓所発堀に当って



了 博 上 村

は南の御霊屋、後者は北の御霊屋と寺の南北に当るので呼ばれていたのである。両御霊屋合せて九十六棟、昭和五年に国宝建造物に指定された伏見桃山時代から江戸時代にわたる代表的美事な美術工芸品の倉庫の感があった。今次第二次大戦々禍によって、その主なる部分九十棟が炎上、僅かに諸門の一部が残されているにすぎない。

昨冬竣工した世界一の東京タワーが、その後方にあつて、美しい近代美を中空に輝かしているのも、夏草生え茂る中に礎石のみ見られる御たまの焼跡は、ただ荒涼の感一入に、深いものがあるばかりである。

約二万坪に及ぶこの焼跡に点在する墓地を現在の増上寺境内（二号地）に改葬することとなり、斯界の権威者によって調査団が結成され、昨年八月以来改葬事業が行われている。

二

南のおたまやは、二代將軍台徳院殿秀忠公夫妻の御廟であるが、事實は秀忠公の墓地のみである。

昨年七月二十九日、徳川家正氏外文化財保護委員長河合弥八氏外立合のもと、増上寺椎尾大僧正導師、衆僧による手厚い御回向の後、西武鉄道関係の人々によって発堀が始められたのである。徳川治世二百五十年間、東照神君家康について將軍となった秀忠公の墓と云う訳で、その発堀が発表されると、人々の注目の焦点となった。

宝塔台下の敷石を除くとその下は五六寸の空間があり、一個約二千貫以上と云われる長さ一丈位の柱状の石が、二個東西に渡されていた、その下に約六尺四方の石室が設けられてあつたのである。石材はいづれも伊豆石であつた。棺は桧材のあつ板で俗に早桶と云われる形のもの、底部は小判形、上部は四角形、上げぞこ、たがは青竹三段であり、用材の内外は絹布張りであつた。下部の外側には、桿を通して吊^かげるように鉄製の環が二個あて前後についていた。公は寛永九年正月二十四日五十四才の逝去である。本光国師日記などによるならば、二十六日の夜中ひそかに老臣土井大炊頭利勝ら十名の人々によって増上寺に吊ぎ

東京都港区芝公園増上寺旧境内地には徳川家の墓地がある。

増上寺を中心として寺に向つて左手（一号地）とその右手（三号地）である。前者

こまれたのであった。

三

副葬品としては種ガ島（銃）が、棺桶の最下部向って右端前後にわたって置かれ、後の方に銃把があった。遺体がすぐ右手でとれるような位置である、ついで薬きょう

と飲薬も入れその他少しのものがあつた。御遺体は正面東向き安座、將軍の正装である黒袍の衣冠束帶笏を持ち、大刀を後方左手に、つかを下にたてかけ、小刀は前におき、右手棺の外側には産衣のはいった箱が置かれていた。遺体の下には部厚い大柄な絹布の蒲団が敷かれていたのであつた。一見してすこぶる簡素なもので、如何にも武人らしい棺内の状態であつた。併し総じて丁重なものである、その（一）をあげると、いつ誰が参詣にきても、正面から拝まれるよう而も將軍としての温容が保たれるよう配慮されている。その（二）は当時としては大変に貴重精巧な



二代將軍秀忠公御廟墓

（巨石の下に伊豆石をつみ重ねて石室を造つてある。）

葵紋入り種ガ島（秀忠公が愛用の品と思われる）銃を、棺に入れたことは、公の心をよく理解した云わば心と心とが通うところの尊敬の念がなければ出来るものではないその（三）は、遺体の下に厚い蒲団を入れたことである。お体がいたくないように、又

酷寒の時である、寒くないようにと心がけている。その（四）は、よみじへの道中である、一人旅のことである、恙がなく御先祖さま達のところに行きつくようと、道中くすりを入れていることは、埋葬当時の侍臣や関係者の涙のうちにも人間として、暖かい思いやりを汲みとることが出来る。

その（五）は大刀を後方に置いていることである。外におく所がないので、そのように置いたのではない、秀忠公の温雅な気性を示すものである。將軍なりとする威張った様子がみられない。これは絶対専制の時代であり、専制者であつたから、死んでも尚且つその片鱗は見られるものである。しかるにその様子がどこにもないことは、公の一貫した生死にかかわらない人間としての「よさ」を、誰にも「ほうふつ」と感じさせるものがあつた。

四

北の御霊屋墓所は、三段になっている。一番奥の高いところは、向って左端上席に六代將軍文昭院殿家宣公その一線上南北に十二代將軍慎徳院殿家慶公、十四代將軍昭

徳院殿家茂室静寛院宮和子内親王、家茂公と四方の御墓がある、次の壇上には、づうと北より七代將軍有章院殿家継公その一線上に九代將軍惇信院殿家重公墓所があり、その下壇、壇と云うよりは広場である。そのほぼ中央部二段目の石垣にそつて、二代將軍台徳院殿秀忠公室浅井氏崇源院殿の墓がある。

寺伝によると、秀忠公は生前菩提寺である増上寺に埋葬されるべく、旧本堂裏の安国殿（元和二年四月逝去家康公法号）と竝ぶ一線上の下位に墓地を既設していたのであった。偶々最愛の奥方が逝去されたので、その奥方を、自分の予定された墓所に埋葬したとする。増上寺古図を見ると成程境内は尚整備さるべき所すくなくなかった。伝説も一面の真理を伝えている。六代文昭院殿葬式後七代九代と配置よく葬っているが、十二代愼徳院殿十四代昭徳院殿夫妻の墓は、しかるべき余地がなかったと見えて、現在文昭院旧墓地北隣りにあった地藏山をならして、その墓地に宛てていることが判る。

崇源院殿の墓地を中心として、その左側手前に左より桂昌院殿月光院殿墓地がある。崇源院殿墓地の前方やや右よりに六代文昭院殿室天英院殿更にその前方左よりに十一代文恭院殿家齊室広大院殿墓地があり、右手に瑞春院殿（五代常憲院殿綱吉側室堀田氏）等がある。

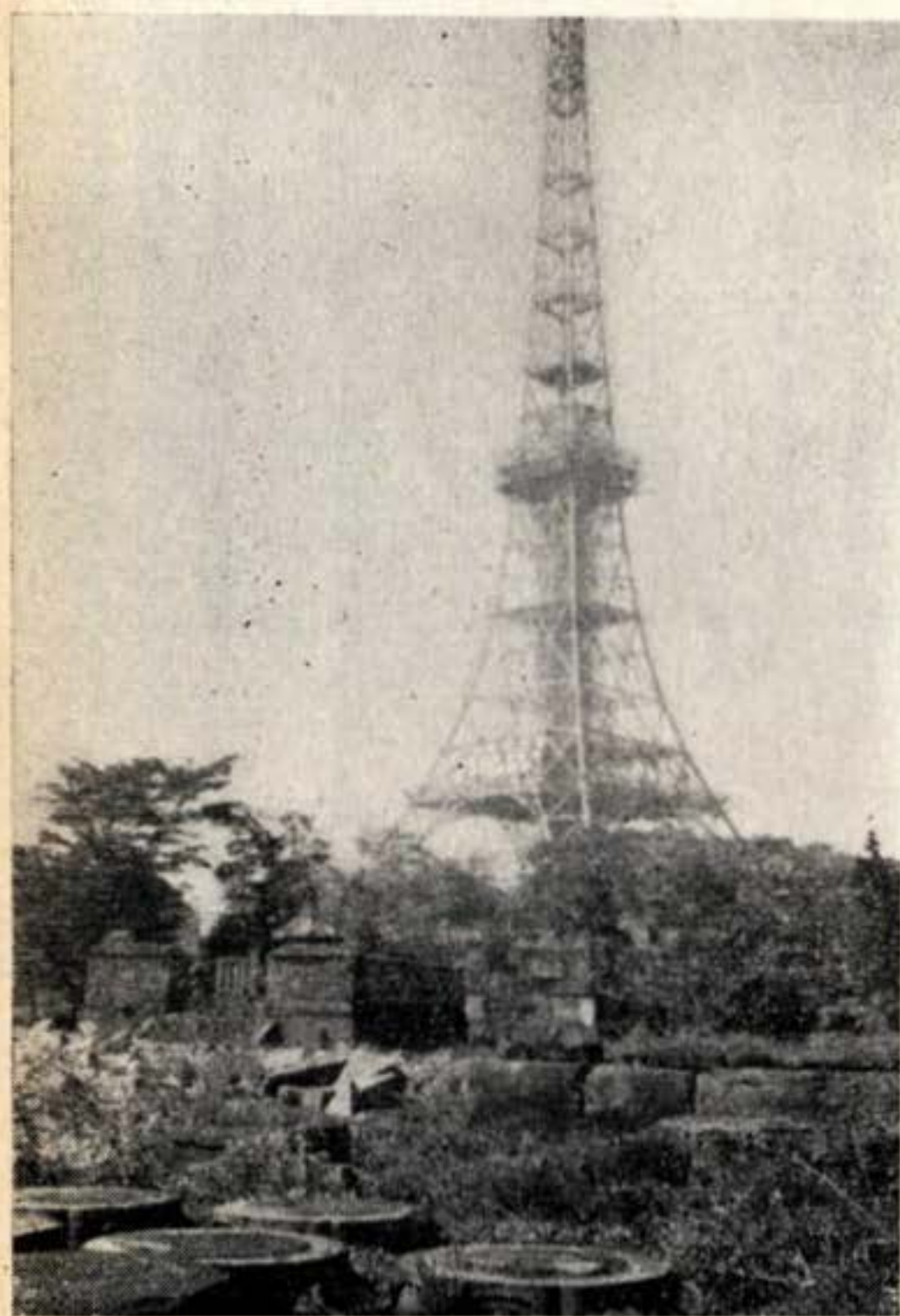
崇源院殿墓地左手の桂昌院殿は三代家光公の側室ではあるが五代綱吉公の母本庄

氏、月光院殿は六代家宣公側室勝田氏七代家継公の母である。天英院殿広大院殿は二方ともに子なしであるし瑞春院殿にも子がない。

五

現在の発掘状態は、六代七代九代十二代十四代夫妻、天英院殿広大院殿桂昌院殿が終っている。

いづれも秀忠公の墓と異って、宝塔とそ



（発掘前の北御霊屋）

（後にそびゆるは建築途中の東京タワー）

の下の石の工事石郭石室共に立派なものである。調査団の考古学上の最高權威者は博物館の矢島恭介先生である。同先生に云わしむれば、徳川式と云うべき構造なりとしている、宝塔下五段各段約六、七千貫の石を一段として重ねておき、上の宝塔の安全性とその威容を保つように出来ている。石郭と石室の間には石灰又は小炭をつめて湿気を防いでいる、石室の中の將軍の場合は銅棺、婦人の場合は銅棺がない、桧材の二重三重又は五重の棺となって、遺体の腐朽と保存に最大の心労をつくしている。銅棺蓋には死者の略歴が刻されている。夫人の場合は石室上の部分の石に、その略歴が刻されていた。副葬品は故人の愛用の品々がその身邊を飾っている。

只どの棺にも共通していることは、丁重に取扱っている様子が暖かく感ぜられる、殊に天英院殿の棺内から、とけた朱粉の中から四本の細い竹の軸が発見された。生前深く帰依していた、増上寺三十六世の顕誉祐天大僧正の、手書きの名号を棺内の四方に仮表葬して掲げたその名残りのもの

である。死して尚名号のうちに安祥として葬られることは、誠に幸福と云う外はない御主人であつた文昭院殿家宣公が永の病床にあつて苦しまれ、諸寺社諸山に祈禱した何らの験もなかった。その時、祐天大僧正が、増上寺秘伝黒本尊無量寿如来を、捧じて江戸城に祈念すると、文昭院殿家宣公の病がらくになり、大僧正の教戒をよく納受、その手書きの名号と念珠は一時たりも、身邊から離されなかつたのである。天英院様も亦祐天大僧正手書きの名号裡にあつたことは、なに不自由のない、時の人將軍家にあつても、信仰は大切であると云うことを教えて止まないし、又なんとなく名号を通して心あたたまる嬉しいものがある。

六

静寛院宮和子内親王の棺からは、なんらの副葬品も見い出せなかつたが、その左手の掌の中から二寸一寸位のガラスの板が出てきた、係員のあるものは、宮さまの手鏡ではなからうかと話していたが、博物館で調査の結果、それは名刺形写真の原版であ

ることが判つた。尚よく調べたところ、御主人であつた十四代將軍家茂公の写真であつたのである。いかなる副葬品よりも、宮様にとっては大切なものである。私共にとっても、なんとも云われない心が暖まり、目頭があつくなるものがある。御夫妻共維新多事の時であり、僅か四年余りの生活ではあつたが、御夫妻の間には永遠に変わぬものが香っている、永久に契つたその誠の花が、人々の心に満ちた^{さんだ}の花として咲くものがある筈である。

七

現在は崇源院殿の墓が発堀されたところである。宝塔の下には、土と小石と砂とで「じぎよう」されていた。発堀に当たっている吉原金次郎氏は、人夫を指揮して丁重に発堀をすすめて行くと石の上部につき当たった。丁重に土をかき分けると六尺四方の大きさと高さ三尺にあまる巨石であつた、水洗したところ宝篋印塔の一部で、その下部には雲形の飾りのある美事なものであることが判つた。その下に高さ二尺五、六寸横三尺五、六寸の石の唐戸が出てきた。石棺

善い人となる

世尊はこう申されました。

「われを罵った、われを笑った、われを打ったと思う人には、怨みはしづまらない」

自分がほめられると、お世辞と判っても、つい嬉しくなってしまう。自分にとって面白くない言葉、自分を叱ってくれる人の話は、自分にとって為になると判っても、耳に入り難いものであります。

謙虚の気持のない人は、問頭にならないような僅かな言葉や動作をみては、自分を罵ったと思い込み、人を怨むことになりまします。中には思い違いをして怨むことすらあります。人を怨むことは自分を傷けることでもあります。私たちの心の中には、自らを傷う害虫が住んでいます。

世尊はこうも申されました。

「自分にとって面白くない言葉が、耳に入ってくる時、相手が明かに、敵意を見せ

て迫ってくる時、衣食住が容易に得られない時、このような時にも、なお静かな心と、善い行いとを持ちつづけることができらるであろうか、それ故に、境遇がすべて心になう時だけ、静かな心をもち、善い行いをして、それはまことの善い人とはいえない。ただ教えを喜び、教えに身も心も練り上げた人こそ、静かにして謙遜な、善い人といえるのである」

たしかに病氣をしたことのない人に、病人の悩みは判りません。平素健康な人は、思いやりばかりか、自分の健康の喜びも知らずに、身体を粗末にし、不養生なことを平気でする人があります。境遇に恵まれている人でも、善い行いもせず信仰の薄い者があります。また人は、逆境に立ってみたいとほんとのことが判らないといわれます。ここに「教えに身も心も練り上げた人」ということの尊さが現れてくることになります。

この世尊の二つのお言葉は同じく善い人ということを示されたものであります。

は初めてである。正面中央に「崇源院殿一品昌誉大禪定尼尊儀」と記され左右に「天下和順」の文が刻されている、尚残る三面には増上寺十四世桑誉了の銘文がある。

石棺の正面手前から宝篋印塔の頭部五尺位のもの、その後方から高さ二尺以上直径三尺位の塔の一部が出てきたのである。石棺の下のところから、塔の台坐の部が見えている、文化財関係の人々も、これは珍しい貴重な文化財と折紙をつけている。

全部堀出して、組立てる時には二丈有余になる珍らしい立派な宝篋印塔が出来る訳である。

何故にそのようにして埋められたか、その配置、構造、その使命と信仰とは、いろいろの宿題を提示するものがある。

貴重な文化財を伴って全部の発掘が終了後は、一個所に徳川家代々の墓所として安置されることになっている。

(著者増上寺文化財部主任)

×

×

×

×

眞理の花たば



——若き女性への仏教入門(五)——

佐藤良智

——こころ貧しきもの——

人生は寂しい。

人生ははかない。

地上に寂しくない人が居るであろうか。試みに自分のまわりをみわたしてみよう。だれもが寂しさを背負つて人生を歩んで居るようにはみえるではないか。そうばかりでもないと言われる方が、あるかも知れない。そう言われる方には私は黙してしよう。なぜなら、その人は仕合せであるからだ。仕合せそうにみえる人もこころのなかに、寂しさを蔵しているのではないか。だまって堪えているのではないか。

人生の春であるから楽しくない筈はない。青春の楽しい声は絶えまなく響いている。

希望に満ちよ。あこがれにこころをおどらせよ。再びない青春の故に。

しかし、ふと、寂しさの虫がこころに、そっと、しのびよりはしないか。

寂しさにこころが、ひしがれはしないか。

愁いにとざされてしまうことはないでしょうか。

こころの貧しさにたえかねて、しのび泣くことはないでしょうか。

このさびしさはどこからくるのか。

たゞあこがれの変形なのでしょうか。

私はそうは思わない。もっともっと深いところから湧いて

青春はたのしい。

くる寂しさなのだ。寂しさのたゞえられている源は、もっと深く人生にねざしているのだ。

この寂しさこそは、人生にめざめてゆく寂しさだ。

この寂しさを大切にしなければならぬ。この寂しさの玉のなかに尊い宝が秘められているのだ。

とはいうものゝ、何と寂しい、虚しさであろう。

無力な自分のすがた。

永遠の生を思う時、瞬時の自分のいのち。

永劫ということばがある。量ることのできない時の流れである。その流れのなかで、自分の生はなんであろう。あまりにも短く、そして、はかないものではないであろうか。ふとあらわれ、ふと消えてゆくうたかたのいのち。虚無感がこゝろをとらえて消えないことを経験されたことはないでしょうか。

虚無感は絶望感だ。

若い人に、自殺というものが、魅惑の時が、ふと訪れることがある。虚無の深淵がのぞかれる時である。何という理由もなく、ふと訪れる。

また、深く、深く、自分をみつめる時、切なくこゝろの痛む時がある。

たよりなく、はかない時である。親も自分から遠い。友だ

ちも自分から遠い。抽象的な、宗教的な対象も自分から遠い。そして、自分には、なにひとつとして勝れたものがない。窓を閉じて、部屋のなかにじっと閉じこもっていたい。

自分は無力の故に孤独である。

こゝろが寒い。

どうしようもなく寒い。

尊い宝などどうしても思われない寂しさ。

この寂しさを逃れようとすればするほど深い淵に沈んでゆく。

暗中にはともしびはないのか。

この寂しさを安易に逃れてはいけない。享楽に逃れようとすれば、人によってはできよう。自らのいのちをためる道が。

自分を見うしなっていたゞに、享楽へ走る道が。

寂しさに徹することのみが寂しさを逃れる道であります。

秘められたる宝は寂しさの窮るところにあります。

いなこの寂しさを通じてこそ、まことの人生が開かれる。

この寂しさは、

人生を通じての、

憂い、

悲しみ、

苦しみ、

悩み、

につながるものです。

釈尊は、深くこの事実を、こゝろにきざまれた。生死七日にして、母を亡った多感の釈尊が青春の人生の愁い、そして、寂しさを味われない筈がない。

この寂しさから釈尊の信仰体系はきずき始められる。

夢多き青春の人々も、この愁いに沈むうるわしの瞳にうつる人生から、まことの人生の一步が始まるのだ。

現代は若き人々の自己喪失の時代であるという。

わたくしはそれを信じない。

巷には、そのような人をみよう。そのような人たちも、こゝろの奥には深く愁いを蔵している筈であります。

わたくしは真面目に人生を歩もうとしている若人に世は満ちていると信ずる。真面目な人生は、ジット瞳みをこらしめて、それを見つめる人にかけてくると信ずる。

自己をまずみよう。愁い、寂しさにみちみつる自己をみよう。

釈尊は、きびしいことばを使って申されている。

「人生とは苦しみだ。」

寂しいという表現では、満足されなかった釈尊のこゝろの厳しい一面をまざまざとみることができる。

表現の問題ではない。

釈尊は事実、「苦しかった」のだ。痛い程心が苦しかったのだ。

そこからまことの人生が流れ始めたのだ。聖法然も申されている。

自分は、「罪惡にみちみち、生死をくりかえす凡夫」にすぎないと。

そのようなものと自分をみつめる人の真面目さ。苦しさ。寂しさ。

聖徳太子も、「自分も、他人も共に凡夫にすぎない」とさげなく十七条憲法に申されているが、太子の身边を思ってみれば、人生の寂しさが漂っていることばだ。深い反省と、するどい目とが光っている。

寂しさ、苦しきの芽を通じて光がさしてくる。

釈尊は單的に申されている。

「明るくないからだ」と。

寂しさ、苦しきの源は、明るくないことだ。底ぬけの明るさがあれば、寂しさは消える。

この明るさは、大地のはてを尽したところからくる明るさ

だ。

窮まれるところからくる明るさだ。自己を喪失させる眼前の明るさではない。近代は一見、はなやかに明るい。それもよい。しかし、その明るさは寂しさをこぐっていない。人生の底に通じていない。なにかそこにある明るさが弱い。たゞ自分を失わせる表てだけの明るさだ。

人間の深い悲しみを照すには弱すぎる明るさだ。むしろ寂しさをかきたてる明るさだ。憂い、悲しみ、苦しみ、悩みを一層深める明るさだ。この明るさは本当は暗さなのではないかとも思わせる。この明るさを真実の明るさに置きかえなければならぬ。

釈尊は厳かに申された。

無明（くらき）を転じて明とせよと。

若き人よ。

寂しさを克服して真実の明るさを求めよう。

（大正大学教授）

×

×

×

新刊紹介

法然と言うだろう。

「原子爆弾が恐いのではない。

原子爆弾を使用しようとする人間の心が恐いのだ」と。

法然を我々と同じ人間の立場から考え、法然の現実的人間の立場の基礎づけに助力した著者は右のように書いている。

烏帽子も着ぬ素裸の人間となって、専修称名の信念を裏づけとして生きて行くしか道のない、この現実の荒涼たる精神的状況にある我々が、待望する唯一のものは、法然の現代的再生でしかない。

津村氏は仙北の一隅に教化と教鞭にあけくれする真摯なる求道者であると共に、熱烈な信仰者である。氏の抱く法然思想の現代的解釈は、七百五十年忌を迎える宗門に一つの方途を示すものと信じて、ここに紹介する所以である。

津村諦堂 著

法然の研究

A版一三二頁
非売品

発行所 秋田県仙北郡角館町西勝楽町一〇 報身寺

（なお非売品ながら、御希望の方は直接著者に頒布方御依頼下されば幸甚）

浄土歌壇

山形野々々々々々



ある。

天

東京 牧尾多希子

人間の愛と怨みを超ゆるものなき
かとおねに道を求めき

評 煩悩はさとり種の種子、作者は愛情に悩み、愛とうらはらの怨にも身をさいなまれる。そういう人間愛欲の現実を現実として、心の解放される道はないかと、宗教に志した。その心境を一首によりみこんだもの。

地

大阪 菅沼宗四郎

乞食僧あはだら経を知りもせで何
しに人の軒に立つらむ

評 昔は乞食と云えども、一芸を傾けて、素手で喜捨を求めめるのは、よくよく無力の老幼だけだった。布施を受けるのに価する何ものも持たないで、軒に立つのは不都合だと云う作者の批判が

人

福岡 倉田 厚

みそらよりこぼれ来るごと鳥啼き
ぬみ寺の山の春のあけぼの

評 のどかでうつくしく、しかも身のひきしまる山寺の春のあけ方、声調もとのつてうつくしい。

仙台 千葉ちとせ

わが余生この一事にて終れりとな
さず成さんはこの後のこと

島根 渡辺 糸子

鹿皮の袋に水を背負ひ行く国も世
にあり我れバケツ提ぐ

東京 二宮 綾子

子のためにみ国のために我が母の
形見捧げて今も悔なし

富山 関 理一

沼津より伊豆を目ざして車駆る菜
の花畑は黄金の陽炎

大阪 内野 弁子

病む友を訪はむ幾日の旅にさへ堪
へがたきまでわれ老いにけり

鹿児島 長崎 恒子

九十年流離の祖師を偲びつつ流転
もたのし北し南し

石川 神徳 凱一

ひそとして大き牡丹の花さくは寂
しきものを訪ねよ小鳥

神奈川 松原 昌治

匂やかに花の頭巾を召したまふ椿
の下の地藏尊かな

名古屋 堀江真鯉夫

絶対にたがはぬ事が世の中にただ
一つあり死ぬと云ふこと

東京 平川 ウメ

母の日にその資格なきおのれぞと
仏の前に香たてまつる

小田原 中里 文子

おほらかに自然の則にしたがひて
花咲き花落ち哀歎はなし

仙台 台 一迫 春子

古りたれど今に新し光堂ひかりの
中に人を酔はしむ

愛知 堀江 恭子

み送りの堵列の中に敬愛のまなざ
し深きたらちねの君

青森 向井 きつ

夢おほき齢をひたすら包みたる割
烹着こそわが姿なり

河内 清水 幸治

生るるは苦の始りと思ひ見る孫の
寝顔のいとも安けき

和歌山 中川 誠一

ふわふわり如来の駕籠は乗る心地
疲れ越したるねやの雨音

川内市 串岡 君江

錫になく白貝にふとのがれ得ぬ運
命に征きし弟を憶ふ

東京 張山はるみ

きたなきは畳よごすと女あるじわ
が靴下を検査したまふ

東京 多田 勲

みちのくの旅路をいそぐ夢に見き
金色堂の雪のしづけさ

東京 石谷てい子

むら消えの雪の谷間にうす青き水
芭蕉咲き春まだ浅し

東京 阿部さち子

この道は花も樹木も豊にて夕餉の
支度に出づるも楽し

札幌 幌 西島 元甫

夕ぐれは何してあらんなど思ふ子
ら住む方の山茜して

大牟田 岩井 勇

老妻は春の衣縫ひ白梅の咲きしづ
まりて細き雨ふる

沼津 小野 徳司

少女ありダイヤモンドにまさりた
る光放てどいまだ嫁がぬ

東京 岩野喜久代

わが思ふ死は眩ゆかりよき生に続
く日をなどうす暗く見ん

勸募日記 (五)

世のものは、分裂破カイすることは易しいが、円満裡に纏め和解することは難しい。このことを人一倍身を感じとつて

いるのは、兩派当局の首脳部であらう。幸い合同解決の兆はみえてきた。宗祖上人の御忌が眼前に迫っているとき、虚心坦懷に互譲の精神にいきで、速やかに大教団の実現を期したいものである。

宗祖上人は、福德円満な柔和なおすがたの中に、不邪惡徳のまえには断固としてゆずらぬ熾烈なる信念をもっておられた。また、理に合ふことには一歩も譲らずとも、譲歩すべきとき

にはすつきりと歩み寄るといった大きい度量があられた。このことは、宗門人は大いに心すべきことである。

その点、宗門の行政面にタツチされて、永年苦勞された人には、そのキビがよく分るらしい。宗門合同、大浄土宗実現のヒガンをこめて一途にすすまれた前宗務長渡辺真海僧正には、このことが骨髄に沁みている。合同を目前にして、僧正の胸中いかばかりか、永年の苦勞を多としたい。現在自坊西方寺に在つて本格的な仏教音楽設立と普及に大いに努力されており、さらには、自坊の復興にと寧日な

き忙しさ。また余暇書齋にありては、伝法の研究にいそしむ勉強家であられる。本会に対す温情また格別、法体の自愛を祈つて止まない。

宗門人であるかぎり、誰れとて宗門を愛さぬものはなからう。しかし、現代のごときマス・コミの時代には、ただ独り溜息のみ吐いていても、宗門興隆の力にはならない。どしどし積極的な発言をなし、不断に新風を吹きこむ勇氣がなくてはならない。その点一致団結して、主張をかがけて、大いに氣を吐いている団体に一洗会がある。その会の有力なメンバーの一人である

原口徳正師は、自坊正受院にあつては、檀信徒の教化をコツコツとやる実践家でもある。温厚な人柄には師にまつわるすべての人々の信任をあつめ、今後大いに期待を寄せられている

さらに私たちは、長善寺に山本貫瑞師を訪れた。おたずねしたときは折悪しくお会いするところが出来なかったが、有りがたい御厚意をいただいた。師は現在巢鴨女子高校の校長として、忙しい日々を過して居られる。また自坊の復興も立派に成り、師独自の識見により大いに教化の実をあげておられる。

長善寺を辞して、私たちは西光庵に向つた。このまえ青山の善光寺を訪問したときも、その印象をつよくしたのであるが、いずれに伺つても尼僧さんの寺は、清潔さがたまたれているということである。一般の氣がつかぬ細部にわたつて、細心の注意がはらわれている。清掃された境内をすすんで、莊嚴のゆきとどいた本堂に詣でたとき、そこには観念的な理屈はフツ飛んでしまい、無言のうちに具体的

な実践道が示されていることに気づいた。住職北川教全尼の温い心づかいに一同感謝したことであった。

宗教は観念でなくして実践であるということにきざみながら、大音寺に矢花静真師をたづねた。若い住職は、幼稚園を経営して、幼少より宗教情操をふき込み仏像を結んでいる。ちよつと高台にある本堂、庫裡および墓地はきちんと整理され掃除もゆき届いていた。一掃除、二勤行という教訓を身に体して、若き情熱を教化に捧げているすがたは尊い。みのり多き種が年増すごとにだんだん蒔かれることであらう。

ある大僧正も語られていたが物心ついてからよりは、三、四才の時分、祖母の膝にいだかれて頭を撫でられながら、無心に仏壇のまえで手を合せた記憶の

方は鮮やかに甦がえつてくるということとは、それだけ感受性が素直であり、体でうけるからであらう。我々が一大事に当面したとき一番役に立ち、解決のきずとなるのは、眼や耳から導入されたものでなくして、この体で経験したことである、という事をきくが、その人の生涯の思想、信仰の形成も、観念より体験が優先する、幼児期の教育が重要な役割を果すことは確かであらう。仏教人の経営する幼稚園も、その点が考慮されて今後ユニークな教化教育法がのぞまれる。

これらのことは、目黒の祐天寺にしても九品仏にしても、また欣浄寺の附属幼稚園にしてもその苦心のあとがよく窺える。名利祐天寺は、モデル幼稚園だけあって設備万端にわたって完備している。住職巖谷勝雄師は

大山に相応した立派な方である。いくたの社会事業を営んで、多角的な教化活動をされている。またとくに鑽仰会の運動には惜しみなき援助をいただき、多大の厚意を寄せられていることは、私たちの深い感激である。

九品仏浄真寺は、七堂伽藍の完備している点では屈指であらう。住職清水順碩師、この寺は、踊念仏でも有名である。こ

の名利も大山のうえに大胡坐をかくようなことはなく、幼稚園の経営をはじめ積極的な教化意欲をもやされていることは、宗門のためにも力強い。

つぎに欣浄寺は住職安井真教師である。年輩も働き盛りというか、ライ落な性格が人に愛され。檀信徒および幼稚園母の会などの信用もあつた。

(AM記)



中村 弁康上人 正僧正准司教

去る七月三日千葉県木更津市専念寺において遷化さる。行年七十五才。上人は静岡県清水市実相寺中村弁応二男として生れた。宗会議員、教学部長などの要職を歴任、大本山増上寺執事長を最後に、第一線を引退された。著作には

「法然上人とその信仰」「信仰問答」

「浄土宗読本」「法然聖語読本」等々

とくに、法然上人鑽仰会とは深い関係があり、浄土誌上にも信仰相談をはじめ、いくたの論文随筆を発表して、多くの読者を魅了したものである。

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円（送料共）です。

◇会員には毎月「浄土」を配布いたします。

◇この会は皆様の会ですから、その発展の為にお一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすりめ下さい。

◇お申し込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一力年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土

八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年七月廿五日 印刷

昭和三十四年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

東京高等保育学校長
駒沢大学教授
日本童話協合理事長

内山憲尚先生の二名著

お母さまの童話

B 6判・二四〇頁
定価二五〇円・千三〇円

◇ママ、お話をしよう……とせがまれませんか？
そんな時に、この本一冊あれば、すぐ話せます。
◇幼稚園・保育園の、三年保育や年少組のお話に、
お困りありませんか？ 本書はそれを解決しま
す。

仏教保育二十章

B 6判・一九五頁
定価一八〇円・千二四円

◇単なる保育と仏教保育とはどう違うか。この仏教
保育の特色が如何に大切であるか……これを簡明
にまとめ、現今行うべき課程や必要な法規をつけ
加えた、仏教保育を行うための最良の手引き書。

東京都中央区京橋二ノ一（塩山ビル）

発行所 青山書院

電話京橋(56)〇七五四
五九二
振替東京九九三〇三番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和三十四年七月二十五日印刷 昭和三十四年八月一日発行

浄土

第二十五卷

第八号

定価金五拾円（送料）

前静岡大学教授 石井真峯著

英文 日本仏教

定価 二二〇円
千二〇円

大学教養 高校上級教科書及び一般外人に仏教を理解
させるために著者一流の流麗な筆致で書かれた日本仏
教入門の書

発行所 大本山増上寺教務部

東京都港区芝公園二号地ノ一
振替 東京 一五四五四番

惻々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

甦えるいのち

A 五版・二十七頁
定価三十円・千八円

二十部以上一五分引
五十部以上一割引
百部以上一割引

東京都品川区上大崎一の七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替 東京 八二二八七番